



昭和56年度

宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う

増福寺古墳群発掘調査報告書

昭和 57 年 3 月

八雲村教育委員会

はじめに

前年度からの継続事業として、農林事務所による「宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業」の採土地に当たる、増福寺裏の古墳調査を実施しました。

この古墳は、「増福寺古墳群」の一部でありまして、本年度は、昨年度に調査した地域に接する二基の古墳を中心に調査を行いました。

調査は、昭和56年9月から翌57年3月までの期間、本村教育委員会主事補宮本徳昭がこれに当たりましたが、この間、八雲村文化財審議委員並びに県教育委員会文化課のご指導と、地域住民の方々のご協力を賜りましたこと心から感謝申し上げるものであります。

調査の状況とその結果につきましてこの報告書を作製いたしましたが、昨年度の調査結果と総合いたしますと、増福寺古墳群の生成過程の解明へ見通しを持つことができたこと、また出土品として当方では珍しい「子持ち蓮」を見ることができたのは、大きな成果であったと存じます。

この調査並びに調査書の作製にご指導とご協力を賜りました方々に深甚の謝意を表します。

昭和57年3月

八雲村教育長 小松正雄

例　　言

1. 本調査報告書は、「宝満山地区県営公害防除特別改良事業」に伴い、昭和56年9月1日～昭和57年3月10日まで、八雲村教育委員会が受託し、調査した報告である。
2. 本調査は、八雲村教育委員会主事補宮本徳昭を担当者として、島根大学学生房宗寿雄の補助を得て行い、事務局は八雲村教育委員会主事補宮本徳昭が担当した。
3. 遺物整理は、宮本、房宗、須山きよ子が行った。
4. 各項目の執筆担当者は目次に併記したが、結語は二者協議のうえ、遺構・遺物とに分けて各執筆した。
5. 本報告書の編集は宮本が行い、実測図は各執筆責任者、トレスは房宗と須山があたり、写真撮影は宮本が行った。
6. 増福寺古墳群を「Z」と記号化し、番号は「01」のようにした。
7. 本調査は、県文化課埋蔵文化財第1係職員各氏をはじめ、八雲村文化財保護審議会委員東森市良（県立横田高校教諭）氏の多大なる御指導を賜った。

目 次

I 調査にいった経緯	(宮本)	7
II 位置と環境	(宮本)	7
III 調査結果		13
遺構	(宮本)	13
1. 20号墳		13
(1) 墳丘の調査		13
(2) 内部主体		13
(3) 遺物の出土状況		15
2. 21号墳		16
(1) 墳丘の調査		16
(2) 内部主体		17
(3) 遺物の出土状況		17
3. 22号墳		19
4. 23号墳		19
(1) 墳丘の調査		19
(2) 遺物の出土状況		20
5. 24号墳		21
(1) 墳丘の調査		21
(2) 遺物の出土状況		21
6. 25号墳		23
(1) 墳丘の調査		23
(2) 遺物の出土状況		24
7. 26号墳		24
(1) 墳丘の調査		24
(2) 遺物の出土状況		27
8. 石圍み遺構		27
遺物		29
(1) 土器	(房宗)	29
(2) 石器	(宮本)	33
IV 結語	(宮本・房宗)	38
V 図版		49

挿図目次

図 版

第1図 周辺の遺跡	8	I-1 20・21号墳 発掘前近景
第2図 増福寺古墳群分布図	9	(東より)
第3図 増福寺古墳群発掘状況図	11~12	I-2 20・21号墳 発掘後近景
第4図 20号墳 墳丘実測図	14	(東より)
第5図 20号墳 主体部実測図	15	II-1 20号墳 発掘前 (東より)
第6図 20号墳 子持甌出土状況図	15	II-2 20号墳 発掘後 (東より)
第7図 21号墳 墳丘実測図	17	III-1 20号墳 主体部 (北東より)
第8図 21号墳 主体部実測図	18	III-2 21号墳 発掘前 (南より)
第9図 21号墳 須恵器甌出土状況図	18	IV-1 21号墳 発掘後 (南より)
第10図 23号墳 実測図	20	IV-2 21号墳 主体部 (北東より)
第11図 24号墳 実測図	22	V-1 24号墳 土師器出土状況
第12図 24号墳 土師器出土状況図	22	(北より)
第13図 25号墳 実測図	23	V-2 25号墳 検出後 (南東より)
第14図 26号墳 実測図	25	VI-1 26号墳 検出後 (北東より)
第15図 26号墳 土括実測図	26	VI-2 26号墳 土括 1 (東より)
第16図 石囲み遺構 実測図	28	VII-1 26号墳 土括 2 (東より)
第17図 20・21号墳 出土遺物実測図	34	VII-2 検出後遠景 (北より)
第18図 20・23号墳 出土遺物実測図	35	VIII-1 石囲み遺構検出状況 (東より)
第19図 24・25号墳 出土遺物実測図	36	VIII-2 石囲み遺構掘り方 (東より)
第20図 石囲み遺構・表探遺物実測図	37	IX 20・21号墳 出土須恵器
第21図 増福寺古墳群関係編年図	47	X 23・24号墳 出土土師器
表		
第1表 増福寺古墳群一覧表	9	XI 24号墳 出土土師器 25号墳
第2表 増福寺古墳群土器観察表	29	25号墳・石囲み遺構 出土須恵器
		表探須恵器・石器
		表探石器

I 調査にいたった経緯

増福寺古墳群発掘調査の発端については前年度分で述べられているので、今年度の経過を述べていくこととする。^{註1}

本年度の発掘調査については既に予定されていたことであったが、村側の事情により昭和56年8月22日から、松江農林事務所と本格的な協議に入った。前年度関連事業で調査費用・期間について、順調な契約の締結となった。

発掘調査は、昭和56年9月1日から約2箇月余の期間を予定して、2基の古墳を対象として入ったが、10月中旬に当初予想していなかった（既に破壊されていると判断）場所の表土削平があるので、断面の確認調査を実施した。この結果、溝状造構と遺物が検出され、部分的に古墳の痕跡が残っていると予想した。

これをうけ県文化課と協議の上、昭和57年1月下旬に松江農林事務所と契約変更協議をし了承を得た。現場調査は昭和57年3月10日終了し、その間同時進行で報告書作成をした。

註1 「昭和55年度宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う増福寺古墳群発掘調査報告書」 八雲村教育委員会 1981年

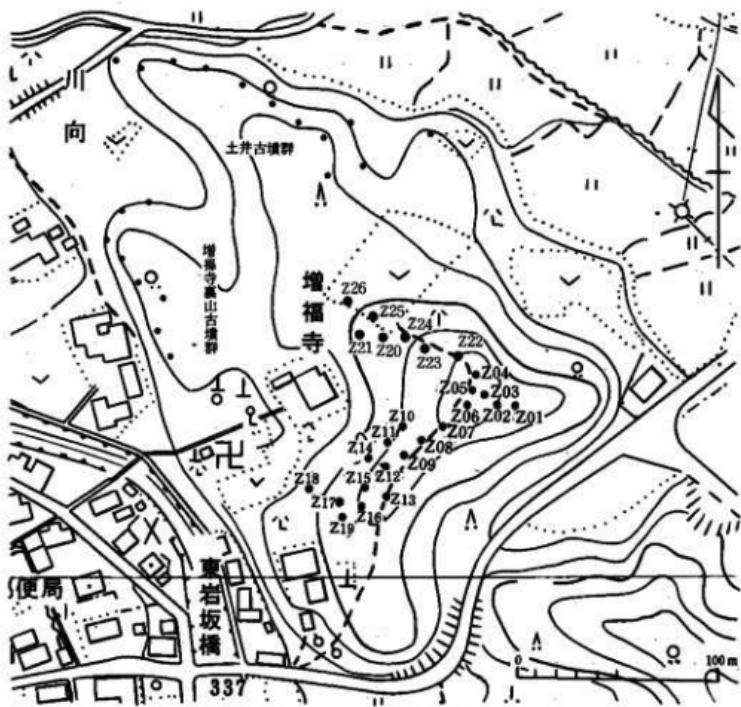
II 位置と環境

八雲村は松江市の南郊に位置し、東から東出雲町・南から広瀬町・西から大東町にそれぞれ囲まれ、東西8km・南北10km・総面積55.41km²を有し、80%以上を占める山々の間から北流する意宇川及びその支流に沿って耕地が開かれているが、広い平野部はこれら河川の合流する所及びその下流部に位置している。

本村の遺跡は第1図に見られるように、この平野部を取り囲むように分布・集中し、各河川の中流域にまで分布している。この遺跡の中で、特に集中している場所が6箇所程度ある。日吉地区では、西の岩坂御陵参考地周辺部と東の松江市



第1図 周辺の遺跡（「八雲村の遺跡」追加）



第2図 増福寺古墳群分布図

番号	規模(m)	高さ(m)	填形	備考	番号	規模(m)	高さ(m)	填形	備考
Z01	一辺10.0	1.0	方	発掘	Z14	8.5	1.2	?	西面八十八ヶ所
02	タ 12.5	1.0	タ	タ	15	一辺 6.5	1.7	方	タ
03	タ 14.5	1.5	タ	タ	16	タ 8.0	1.7	タ	一部破壊
04	12.0×10.0	1.3	タ	タ	17	タ 8.0	1.5	タ	タ
05	一辺 8.5	1.2	タ	一部発掘	18	タ 6.0	1.2	タ	タ
06	タ 6.0	1.0	タ	円墳状	19	タ 8.0	1.5	タ	一部残
07	タ 8.5	1.4	タ	西面八十八ヶ所	20	10.0×11.0	2.3	タ	発掘
08	タ 7.5	1.1	タ	タ	21	9.5×11.0	1.8	タ	タ
09	9.0	1.1	?	タ	22	?	?	方?	一部発掘
10	一辺 8.0	1.5	方?	タ	23	?	?	方	残部発掘
11	8.5	1.5	方	タ	24	?	?	タ	タ
12	一辺 8.5	1.5	方	タ	25	10.0×11.0	?	タ	タ
13	11.0×9.0	1.7	タ	タ	26	11.0×12.0	?	タ	タ

第1表 増福寺古墳群一覧表

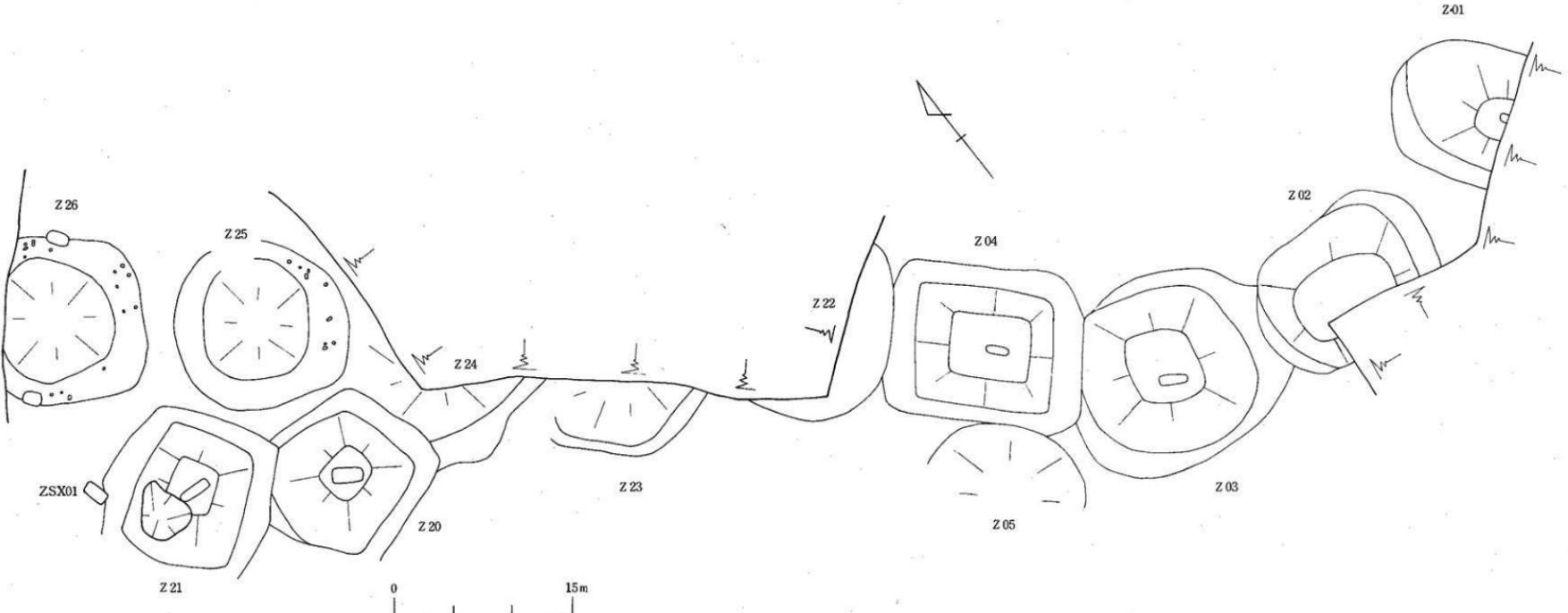
に連続する八雲西百塚、川向地区では増福寺のある丘陵部、その南の安田地区北部、同じく安田地区の西側丘陵の東斜面一帯、八雲電話交換局南の丘陵周辺部である。この中八雲西百塚と増福寺のある丘陵部以外は、横穴と古墳が群集している。このような中で、昨年度から増福寺のある丘陵南端に位置する増福寺古墳群が、宝満山鉱害の防除事業の一環として発掘されてきた（土井13号墳は昭和54年2月発掘）。

この結果は既に報告されているので省略するが、今年度分とあわせ考へると、^{註1}5世紀後半～6世紀前半期の古墳が群集していると推定される。昨年度とあわせ計11基の方墳が発掘され、未発掘の古墳も方墳としてほぼ誤りなかろう（第2図・第1表）。このように26基前後の方墳が、ほぼ時期を同一にしながら小集団を形成しながら、次々と築造されたという事実は、今後に大きな意義を見出される古墳群であろう。

また遺物の点からみた場合、古墳としては大きくなく、むしろ小規模の古墳でありながら、山陰地方では古式の須恵器を出土し、土師器に須恵器が入ってくる過程を如実に物語っている。しかも土師器の出土状況や須恵器子持蓮という、他に例のないものがあった。

発掘してその実態が判明すること自体は喜ばしいことであるが、原因があるとはいえ安易に発掘してきている現在、個々にとらえるまえに周辺部との総合的な把握の上から、発掘を避けるようにつとめることが必要になってきている。

註1 「昭和55年度宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う増福寺古墳群発掘調査報告書」 八雲村教育委員会 1981年



第3図 増福寺古墳群発掘状況図

III 調査結果

今年度の当初発掘予定古墳は増福寺20号墳と同21号墳であったが、発掘中に発掘範囲外の表土削平があったので確認調査した結果、増福寺22~26号墳の墳丘基底部及び周溝が検出された。以下古墳毎に、遺構（墳丘の調査・内部主体・遺物の出土状況）と遺物とに分けて述べていく。

遺 構

1. 20号墳 (Z 20)

(1) 墳丘の調査 (第4図)

Z 24の西・Z 21の南東・Z 25の南に、それぞれ接する標高49.0mに位置していた。地形測量前から、Z 21より古い方墳であると予想されたが、地形測量後一層明確に本古墳群中でも大きい方墳であると判明した。

発掘の結果、北・東・南を周溝がめぐり、西は平坦面及び自然傾斜で、墳丘平坦面がやや東に偏在し、Z 24の墳丘斜面を破壊して築造された方墳であったが、その後、Z 21により北西隅を破壊されていた。

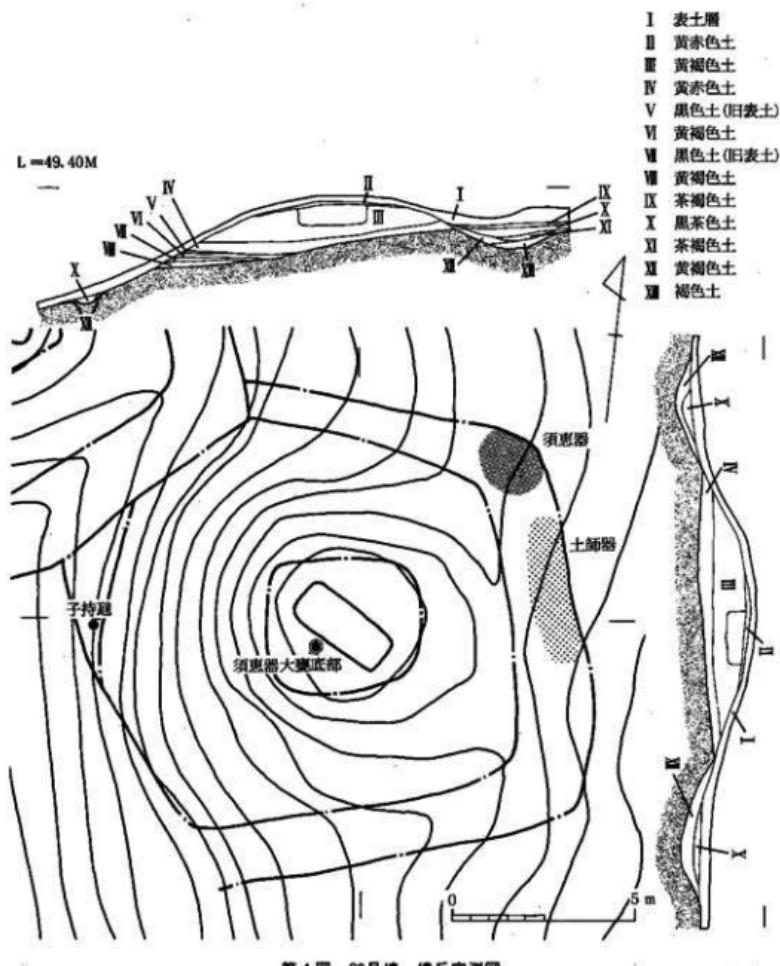
築造時の規模は、墳丘平坦面がほぼ4.0m四方、墳裾で10.0×11.0mの東西にやや長く、西側の裾が広がっている。高さは平均2.3m、高い方で3.0m、低い方で1.5mあった。周溝は平均幅2.3m、平均深さ0.5mであったが、西側に残る周溝状のものは簡略されたものであった。墳丘東側はZ 24を破壊しており、Z 20墳頂部とZ 24墳裾部とが同レベルになっていた。また墳裾北西隅をZ 21に破壊され、これもZ 20墳裾部とZ 21墳頂部とが同レベルになっていた。主体部は墳丘北西一南北の対角線上にあり、短辺に河原石を積み、枕石を置く木棺直葬であった。

封土はZ 24側から傾斜する旧表土上に、墳丘西側に平坦面をつくるように盛土をした後、その上に墳頂部で1.5m前後の盛土をしていった。

(2) 内部主体 (第5図)

墳丘平坦面ほぼ中央に、主軸をN-66°-Wにとり、盛土中にあった。

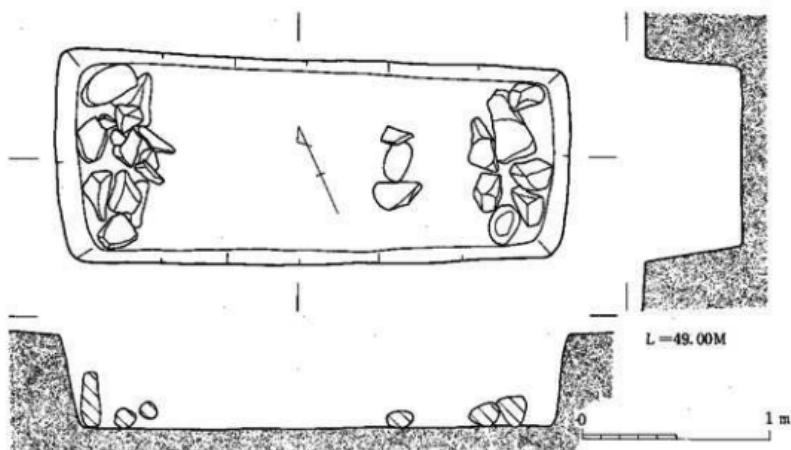
検出規模は、掘り方で長さ2.75m、幅1.10m、深さ0.50m前後あり、木棺痕は



第4図 20号墳 墓丘実測図

長さ 1.7m、幅 0.9m、深さ 0.5m 前後と推定された。

短辺に河原石群が平行に検出され、長辺東側に同じく河原石 3 個が検出された。このことから、長辺側木板を短辺側木板ではさみ、短辺側木板外側に河原石を積み補強している。そして床面には木板等ではなく、枕石を置いていたと推定される。



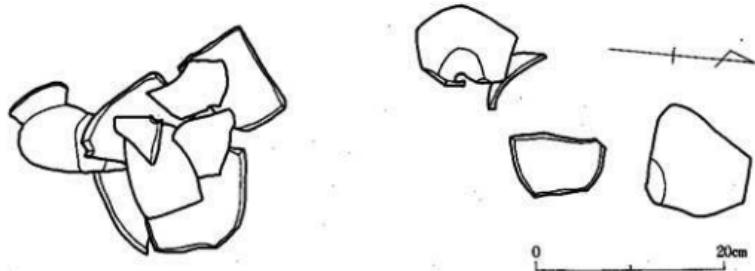
第5図 20号墳 主体部実測図

(3) 遺物の出土状況（第4・6図）

本古墳からは、土師器高杯（数個体）・同壺（1個体）・須恵器子持壺（1個体）・同大甕（1個体）・同短頸壺（1個体）・同坏（1個体）が出土している。

須恵器大甕は、墳丘平坦面中央やや南偏したところに底部があり、主に南斜面から西斜面にかけ裾平坦面まで破片が散布しており、口縁部の一部が北斜面にあった。口縁部から頸部にかけては約程度であったが、他は約程度である。

同じく子持壺は、西裾平坦面に一括つぶされた状態で検出され、一部親壺の口縁部がZ21の南周溝内表土直下から検出された（子持壺の原位置と推定する所は



第6図 20号墳 子持壺出土状況図

表土直下であり、これが現在箇採取の場になっていることから、後世の擾乱によるものと考える）。親甕はほぼ完形に復元できたが、子甕は1個のみほぼ完形で検出された。本来は子甕が4個付いていたものである。

東周溝内表土下堆積土中から、土師器高坏、同壺が細片化した状態で検出され、北東隅周溝部外側（Z25との境内側）からは、須恵器短頸壺・同壺が出土している。土師器は復元できないが、概形は判断できる程度のものであり、須恵器はほぼ復元が可能なものであった。

以上が本古墳の遺物出土状況であるが、この内須恵器短頸壺・同壺以外は直接本古墳築造時と符合する遺物と考えられる。

2. 21号墳（Z21）

(1) 墳丘の調査（第7図）

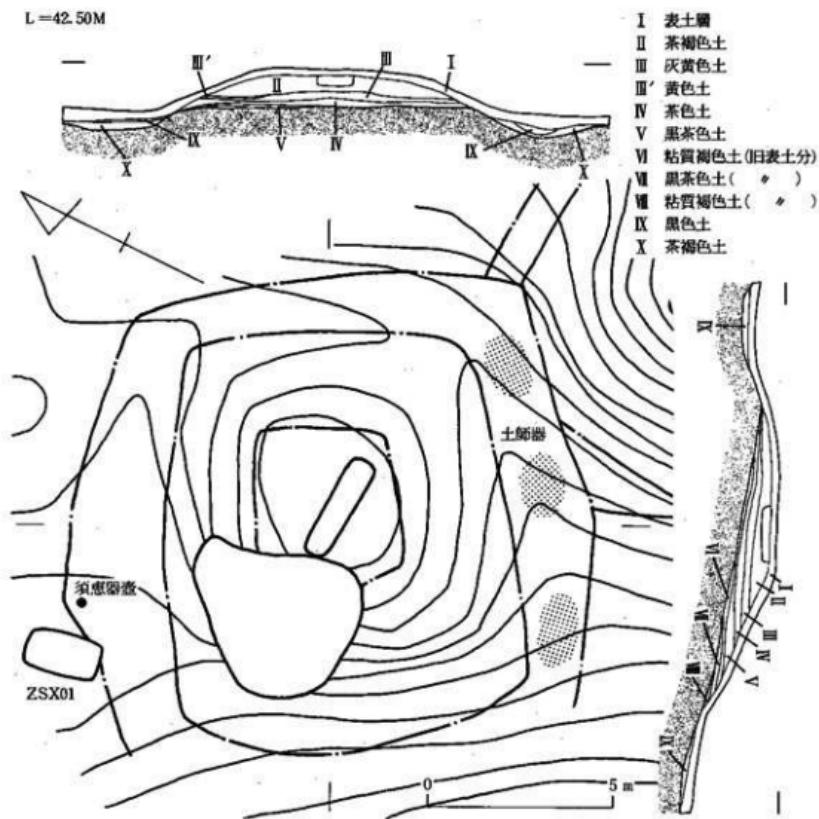
Z20の北西・Z25の西・Z26の南西に、それぞれ接する標高47.0mに位置していた。またZSX01が、本古墳北西隅周溝外側部に後世築造されていた。地形測量以前から $\frac{1}{4}$ が破壊されているものの、整ったやや長方形に近い方墳であり、Z20の北西隅を破壊して周溝を掘っていると判断できたが、地形測量後、一層明瞭になった。

発掘の結果、東・南に周溝がめぐり、北は平坦面ないしは浅い周溝、西は自然斜面となっていた。Z20の北西隅を破壊しており、Z25の北西隅平坦面を若干破壊していた。その後本古墳の北側周溝部に土が堆積した後に、ZSX01が築造されていた。

築造時の規模は、墳丘平坦面がほぼ4.0m四方、墳裾は9.0×11.0mの北東—南西に長い。高さは平均1.8m、高い方で2.3m、低い方で1.2mであった。周溝は平均幅2.5m、平均深さ0.5mであった。北側平坦面は幅が2.0mあり、西に向かって若干傾斜し、西斜面からの自然傾斜へとつながっていた。南東隅でZ20の北西隅を破壊しており、北東隅でZ25の西墳裾隅平坦面を若干破壊していた。主体部は東南東—西北西の墳丘対角線上にあり、墳丘平坦面ほぼ中央に木棺直葬であった。

封土はZ25側から傾斜する旧表土上に、墳丘西側に平坦面をつくるように盛土を1.1m前後している。下から3層前後は旧表土分が層をなしていた。

L = 42.50M



第7図 21号墳 墳丘実測図

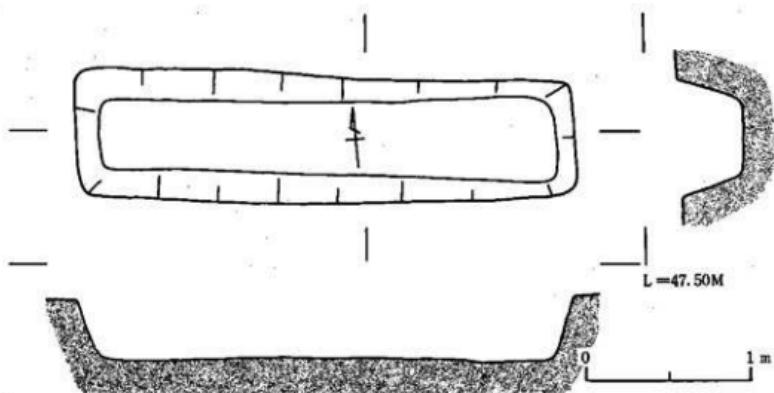
(2) 内部主体 (第8図)

墳丘平坦面ほぼ中央に、主軸を N-87°-W にとり、盛土中の最下層にあった。主体部東側短辺の床面は、旧表土直上にあったことから、当初から厚い盛土はなかったようである。

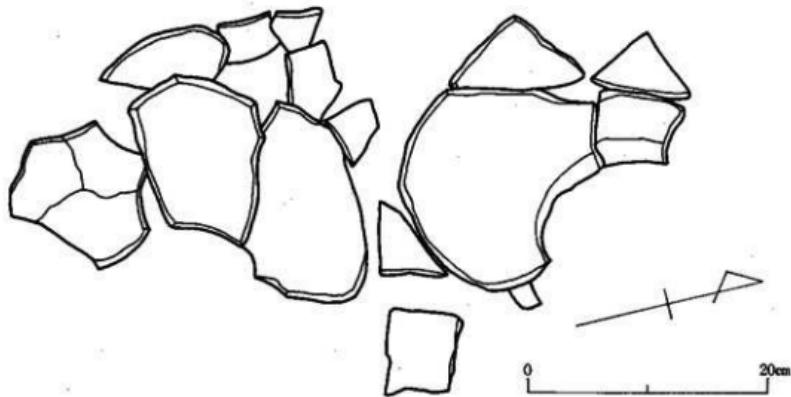
検出規模は、長さ 3.0 m、幅 0.8 m、深さ 0.4 m を測り、木棺直葬と推定される。

(3) 遺物の出土状況 (第8・9図)

本古墳周辺部からは、土師器高壺 (数個体)・須恵器壺 (1 個体)・磨製石斧 (1



第8図 21号墳 主体部実測図



第9図 21号墳 須恵器壺出土状況図

本)が出土している。

土師器壺は、Z20側の周溝部から細片化の状態で検出された。細片化のため状況把握に困難であったが、3ないし4箇所にまとまっていたようである。従って、本古墳に関連した行為時の原位置を保っていると考えて誤りなからう。また細片がまとまっていることは、その時にその場所で破壊していると考えられる。

須恵器壺は本古墳北側裾平坦面のやや外側から出土し、後のZSX01の東に位置している。平坦面黒色土中より検出され、その部分のみ若干凹地になっていた。壺の $\frac{3}{4}$ が、つぶされたようになっていた。頸部にヘラ記号がみられる。出土状態から原位置を保っていると考えられる。

磨製石斧は、西墳裾の表土中から検出された。基部は欠いており、切断痕と推定されるものがある。

他に本古墳北・西周辺より須恵器の細片が出土しているが、時期等の判断は不明である。

以上本古墳の遺物出土状況を概観したが、この中土師器窯壙については本古墳築造に直接的なものであろう。須恵器壺については検討の余地があるが、磨製石斧については間接的なものであろう。

3. 22号墳 (Z 22)

Z 04の北西・Z 23の南西に接するが、昨年度Z 04調査時に周溝の一部を検出し、^{註1}今年度表土削平後の確認調査で周溝（平坦面）の一部を検出したにすぎず、詳細については不明である。

周囲の状況から推察すると、墳丘及び周溝の大半は既に開墾等により破壊されていたと考えられる。Z 04の北西裾平坦面を破壊しており、またZ 23と切り合い関係が推定されるが、遺物等が検出されていないので前後関係は不明である。ほほ方墳と考えて誤りなかろう。

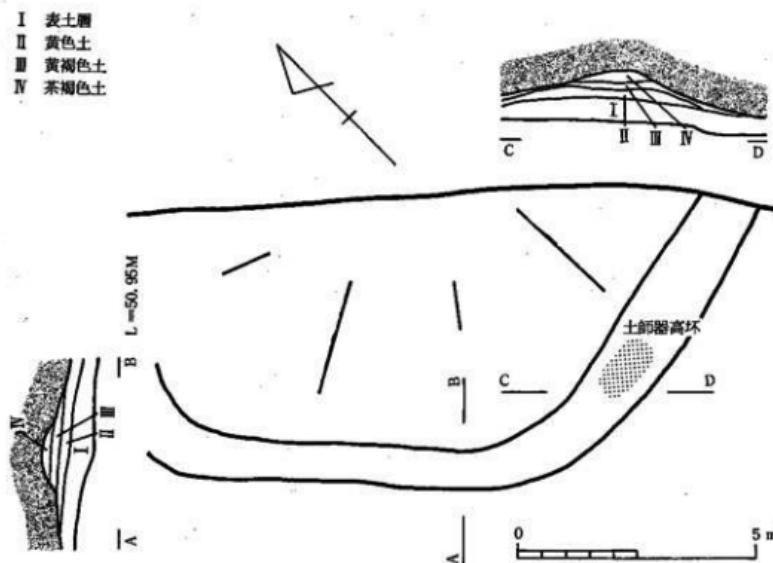
註1・2 『増福寺古墳群発掘調査報告書』 八雲村教育委員会 1981年

4. 23号墳 (Z 23)

(1) 墳丘の調査 (第10図)

Z 22の北西・Z 24の南東に接していたが、墳丘は既に開墾等により失なわれ、周溝及び裾平坦面が全体の $\frac{1}{2}$ 程度検出されたのみで、主体部も不明であった。

表土から周溝上面までは、Z 22側0.5m・北西側0.4mあり、Z 24側裾平坦面は表土直下であった。周溝の深さは、Z 22側が最も深く0.5m・北西側では0.3mであった。周溝幅は、Z 22側1.6m・北西側0.7mを平均としていた。



第10図 23号墳 実測図

墳丘が失なわれていたため詳細は不明であるが、発掘状況や周囲の状況からほぼ方墳として誤りなかろう。また位置的状況により、Z 24より古いと推察できる。

(2) 遺物の出土状況（第10図）

Z 22側周溝から土師器高壙が、9個体分出土した。北西側周溝との隅から東へ3m前後の地点を両端として、約1m間に一括となっていた。いずれも原位置を保っていると考えられ、正立していたものがやや傾斜した状態で6個体、逆立状態のもの3個体に分かれる。また完形に近いもの4個体、残りは脚部または壙部のみであり、図示できたのは6個体であった。

このように多量の土師器が一括して周溝内に置かれていた例は、Z 02出土例と後述するZ 24出土例である。発掘現場の条件により、出土状況を正式図化しえなかったのは残念である。^{註1}

また北西側周溝からは、Z 22側周溝との隅から北西へ1.5m前後の地点で、土師器片が出土している。

本古墳とは直接関係はないが、土地所有者の境界が周溝上にあり、その境界に石が並べられていた。この中より、砥石（4点）・磨石（1点）・敲石（1点）が検出された。

註1 「増福寺古墳群発掘調査報告書」 八雲村教育委員会 1981年

5. 24号墳 (Z24)

(1) 墳丘の調査 (第11図)

Z23の北西・Z20の東・Z25の南東に接していたが、墳丘は既に開墾等により失われ、南周溝部及び南西隅の墳丘裾平坦面の各々一部が検出されたのみで、主体部もZ25側墳裾縁も不明であった。

表土から周溝上面までは0.65m、同じく墳裾平坦面までは0.20mであり、周溝幅1.40m・同深さ0.30mであった。

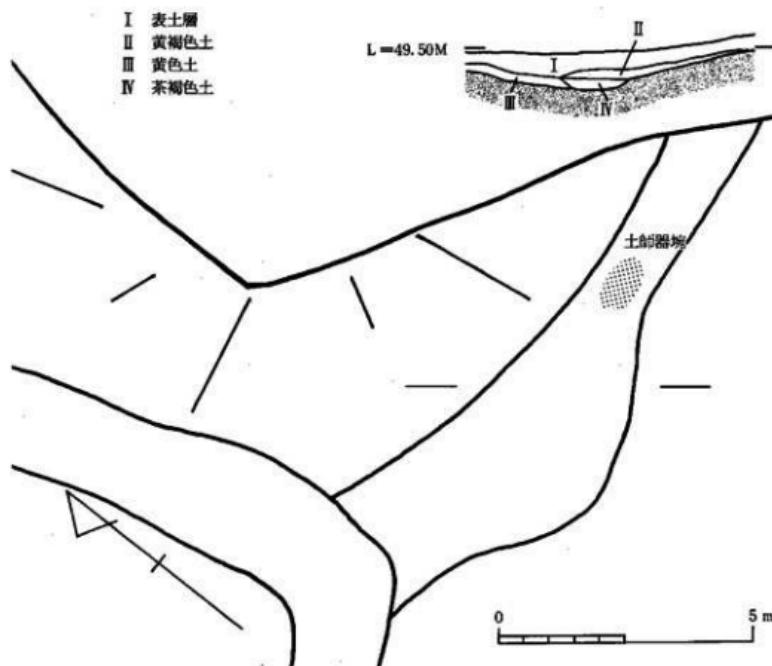
墳丘の大半が失われていたため詳細は不明であるが、発掘状況や周囲の状況からほぼ方墳として誤りなかろう。また位置関係からZ23とZ20とは切合い関係にあり、Z23より新しく、Z20よりは古いと考えられる。さらにZ25よりは古いとも推定される。

(2) 遺物の出土状況 (第11・12図)

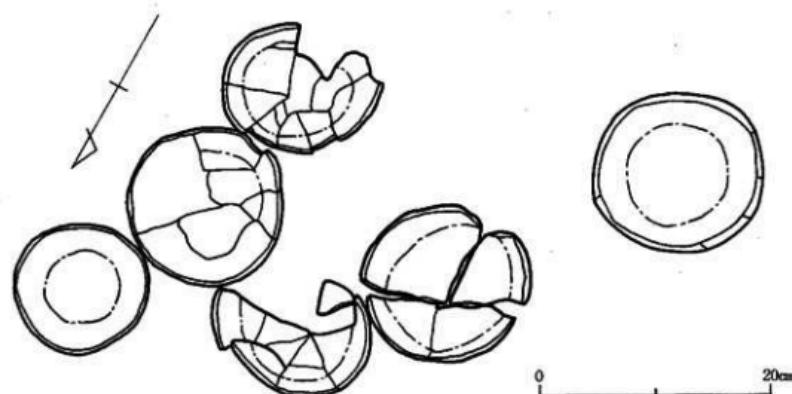
南周溝のほぼ中央ないしやや東に偏した所より、土師器塊が6個各々接し、正しく置かれていた。溝幅の真中、溝の底に並べられたままの状態と考えられる。このように周溝内に土師器が原位置のまま一括して検出された例は、Z02西周溝部の高壙6個と壙1個の例、^{註1}Z23南周溝部の高壙9個の例がある。3例とも互いに異なる点があるが、本古墳群の特徴的なものとも考えられ、今後の研究の問題提起になろう。

周溝上面表土直下からは、須恵器甕片が検出されているが、大甕の破片と判断する以外は不明である。

註1 「増福寺古墳群発掘調査報告書」 八雲村教育委員会 1981年



第11図 24号墳 実測図



第12図 24号墳 土師器出土状況図

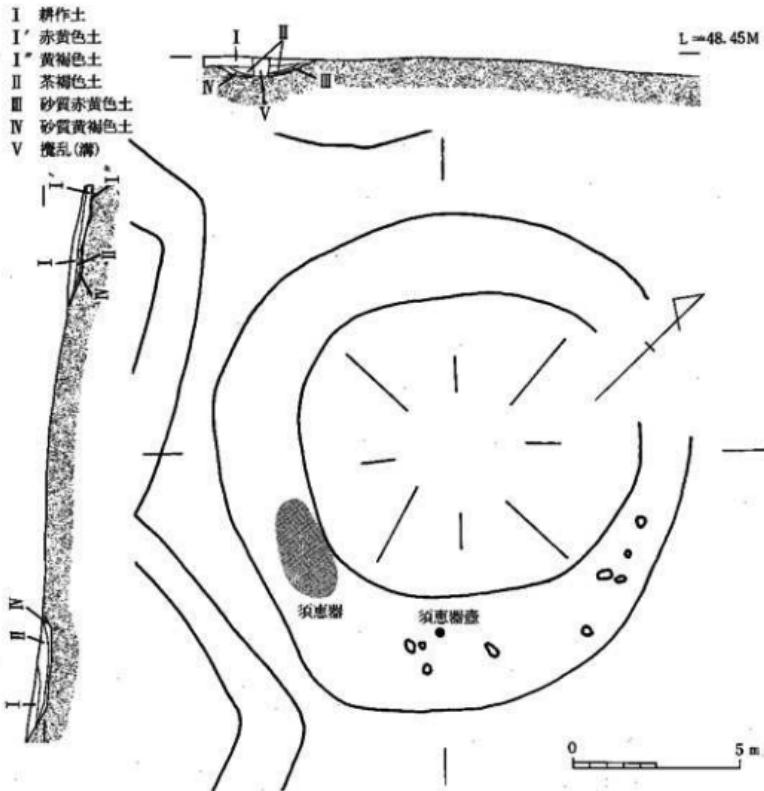
6. 25号墳 (Z 25)

(1) 墳丘の調査 (第13図)

Z 24の北西・Z 20の北・Z 21の東・Z 26の南東に接していたが、墳丘基底部のみが開墾からのがれ、Z 24側・Z 20側・Z 21側の周溝、Z 26側の墳丘裾平坦面が検出された。

表土から周溝上面までは0.4m、同じく墳丘裾平坦面までは0.3mを平均とし、周溝幅2.5~3.2m、同深さ0.4~0.6m、墳丘裾平坦面幅1.8m以上を測った。

主体部等の痕跡は検出されなかったが、東隅周溝内及び南東周溝内より柱穴状



第13図 25号墳 実測図

のものが検出された。規則性等は見られないが、周溝のほぼ中央に径 0.3 m、深さ 0.3~0.6 m の穴が 4 個づつあった。遺物は検出されなかった。

以上のように墳丘基底部のみ検出されたため詳細は不明であるが、周溝等の検出状況や周囲の状況から推して、やや丸みのある方墳としてほぼ誤りなかろう。周溝内の柱穴状ピットは、性格等不明である。位置的なものから、Z 24 よりも新しく、Z 20 とは同時期ないしやや古く、Z 21・Z 26 とは共に墳裾平坦面が一部破壊されているので、本古墳の方が古いと考えられる。

(2) 遺物の出土状況（第13図）

本古墳南東周溝部から南西周溝部にかけて、須恵器が多量に検出されたが、土師器は小細片が数点検出されたのみである。

主に南西周溝中央部よりやや南に集中しており、南東周溝部中央から須恵器高台付短頸壺 1 個体が一括、南西周溝中央部よりやや南付近から須恵器壺・同壺・同蓋壺等數個体分一括して検出された。須恵器壺と同壺・同蓋は、その場でこわれたかと考えられる状態であり、ほぼ原位置とみて誤りなかろう。他の須恵器についても、若干の移動が見られたが、これもほぼ原位置と見られる。土師器はかなり細片化し風化が著しいため、その器種・調整等も判断ができないもので、須恵器とは異なる祭祀方法とも考えられる。

7. 26号墳（Z 26）

(1) 墳丘の調査（第14・15図）

Z 25 の北東・Z 21 の北に接し、Z 25 同様に現況が畠だったため、既に墳丘はなく周溝部のみ検出された。北西側は土取り範囲外だったため調査はしなかったが、境界の状況から現在山林となっている所にも周溝が残存していると考えられる。

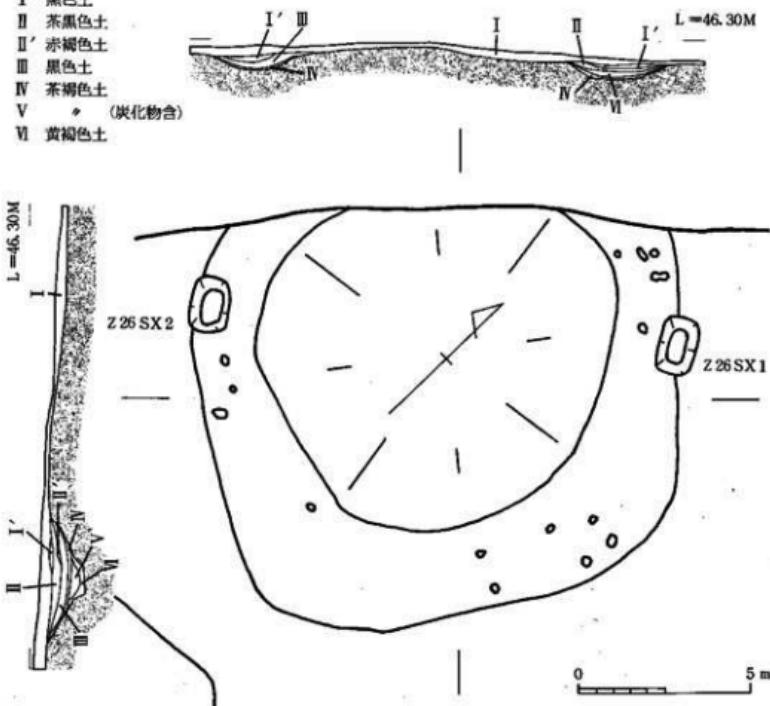
Z 25 側及び南西側周溝は完全に検出され、北東側の周溝及び墳裾平坦面もほぼ完全に検出された。周溝幅は 2.5~3.0 m・同深さは 0.5~0.7 m あり、裾平坦面幅は 3.0 m 前後であった。Z 25 側周溝及び南西側周溝の底は、他の古墳に比べてかなり狭く（Z 23 も同様に狭かった）特に Z 25 側の周溝の場合、両側壁の途中から傾斜度が変化しあかも土塙の壁状になっていた。

本古墳に特に注目されるものに 2 基の土塙があった。いずれも周溝ないし墳裾平坦面の外郭線と土塙長軸線が平行になっており、地山を深く掘り込んでいた。

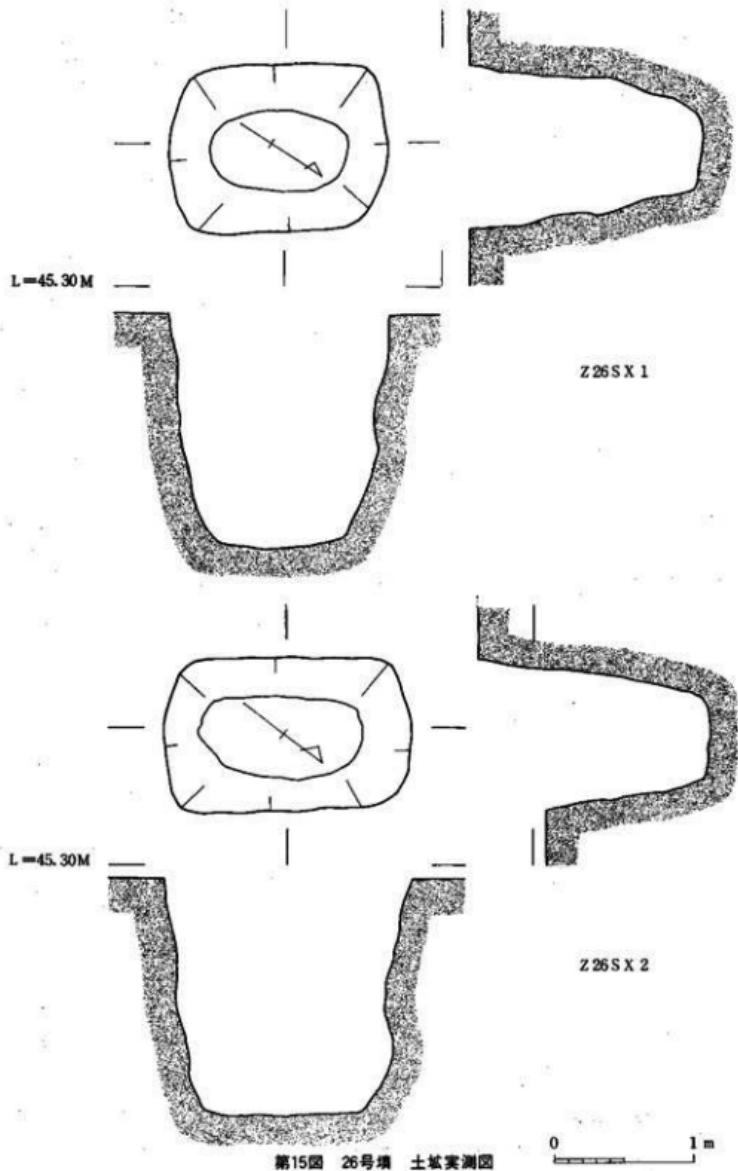
Z26SX1は、 $1.8 \times 1.1\text{m}$ ・深さ 1.7m の隅丸長方形を呈しており、底は $1.2 \times 0.6\text{m}$ の小判状になっていた。遺物は全く検出されず、土層も墳裾平坦面埋土下層が中に入り込んでおり、土塙内土層にも人工的なものはみとめられなかった。

Z26SX2は、 $0.6 \times 1.2\text{m}$ ・深さ 1.4m の隅丸長方形を呈しており、底は $1.0 \times 0.6\text{m}$ の小判状に近い隅丸長方形となっていた。遺物や土塙上面の土層も前と同じであるが、土塙内土層でやや人工的とも考えられる所が、周溝外側レベルと周溝底レベル間にあった。周溝外側は表土から浅いことと、土地所有者の境界と一致するため、攪乱との判断が不分明であるが、 $1.0 \times 0.6 \times 0.5\text{m}$ の落ち込みがあつた。

- I 耕作土
- I' 黒色土
- II 茶黒色土
- II' 赤褐色土
- III 黒色土
- IV 茶褐色土
- V * (炭化物含)
- VI 黄褐色土



第14図 26号墳 実測図



以上二つの土塙を検出したが、遺物が検出されていないため性格等不明である。他に周溝両斜面に柱穴状のピットが検出された。北隅・東隅やや南・西隅土塙南に、各3~6個が対になるかのようにあった。特に東隅やや南のものは、6個が対になっており、溝を挟むように斜めになっていた。

(2) 遺物の出土状況

遺物はほとんど検出されず、周溝底やや上で土師器の微細片が数点あったのみで、本古墳の時期推定資料となり得るものはなかった。

8. 石囲み遺構 (ZSX01) (第16図)

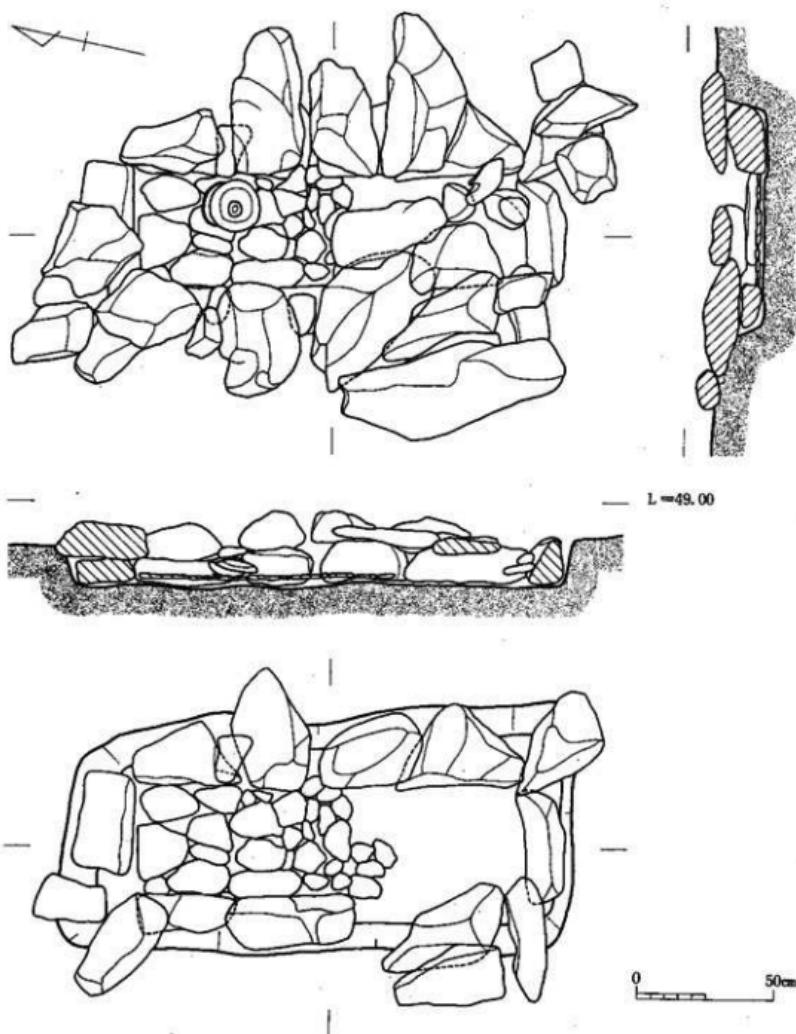
本遺構はZ21の北西隅のやや東に位置し、周溝外縁線と交錯していた。当初高まりも遺物も見られなかったため、見過ごしていたが、Z21北側周溝の検出過程から、当初から若干石が露出していた所の表土を浅く削平した段階で何らかの遺構があると推定された。

上段の石が大半露出するまで下げる結果、長方形に山石及び河原石で囲んだものとなった。内部を六分法で掘った結果、南西隅から西壁に沿って中央に偏した所より須恵器蓋坏が、若干壁にもたれるようにして少し蓋がずれた状態のほぼ正位置で検出された。土層には変化はみられず、遺構内側に壁ないし蓋石と推定される石が数個、若干落ち込んだように検出された。

主軸をN-13°-Wにとり、 $1.95 \times 1.90 \times 0.35\text{m}$ の土塙の中に、 $1.45 \times 0.40 \times 0.30\text{m}$ の内壁空間を長さ $0.3 \sim 0.5\text{m}$ ・幅 $0.15 \sim 0.30\text{m}$ ・厚さ 0.20m 前後の石で囲んでいた。床面には南半分に扁平な拳大ないしやや小さい河原石が一面に敷かれ、北半分にも 0.30m 前後の河原石が若干浮いた状態で検出されているので、築造時からまばらではあるが南半分同様に河原石が敷かれていたと考えられる。

遺構内部や遺構上部の土層については変化はなく、特に遺構上部はほとんど土がなく土層変化は確認できなかった。周囲の状況は、Z21北周溝北縁付近から本遺構の北側 1m 前後をめぐるかのようにU字状の溝が検出されたが、その西側は土砂捨場及び土地の境界とも関連して未発掘である。

本遺構は発掘前から一部が露出していたが、Z21の $\frac{1}{4}$ が破壊されていたと同じように、付近は竹林であり筍栽培の為に土をならしたことによるものであろう。従って本遺構に封土といえるものがあったことはほぼ誤りないが、それがどの程



第16図 石圍み遺構 実測図

度の厚さと形状があったのか不明である。

遺 物

今年度の調査では、土師器・須恵器・石斧・玉磨石・敲石・磨石が出土したが、以下、土師器と須恵器を土器として表（第2表）で、石斧・玉磨石・敲石・磨石を石器として説明し、図面は最後に入れる。

(1) 土 器

第2表 増福寺古墳群土器観察表

	器種・法量 (cm)	成 形	調 整	胎土・焼成	備 考
20-1	須恵器子持甌。親甌は口径14.9、胴部最大径19.7、器高20.5、子甌は同じく9.0、7.8、9.5。	親甌の穴は1つで、4個の子甌との接合部にそれぞれ穴がある。子甌の外部には穴はない。	外面脇中央部はカキ目で、底部は叩きの後でいねいになで消し、内面上半は回転なで、下半は青海波をいねいになで消している。	良好。砂粒をほとんど含まず、かたく焼きしまる。	子甌のうち3つは欠落、子甌の接合は施紋の後に行っている。親甌の底部に接合の痕有り。全面に釉をかぶる。
20-2	須恵器大甌。復元口径約45。	ていねいに作られている。	口縁部は回転なでの後施紋、体部外側には叩き目が、内面には青海波が見られ、何れも部分的になでられている。	良好。少量の砂粒を含む。	口縁部全面にうすく自然釉がかかる。波状紋の施紋具は11本齒のクシ状工具と思われる。
20-3	須恵器壺。高台を有する。口径13.0、最大径16.0、器高16.5。	底部はヘラおこし。	内・外面共に回転なでを施す。	良好。少量の砂粒を含む。	肩部のあたりは岡上接合。
20-4	須恵器皿。復元口径15.1、器高2.1。	糸切り底	内・外面共に回転なでを施す。	やや良。焼成はあまめである。	全面軽く風化。左右対称復元。
21-1	須恵器壺。口径14.8、最大径22.7、器高25.0。	丸い体部と鋭く折れ曲る短い口縁をもつ。	口縁付近は回転なで、体部内面に青海波、外側に叩き目がみられるが、何れもていねいになで消している。	良好。砂粒をほとんど含まない。焼成はややあまい。	頸部にヘラ描きの沈線（ヘラ記号）がみられる。

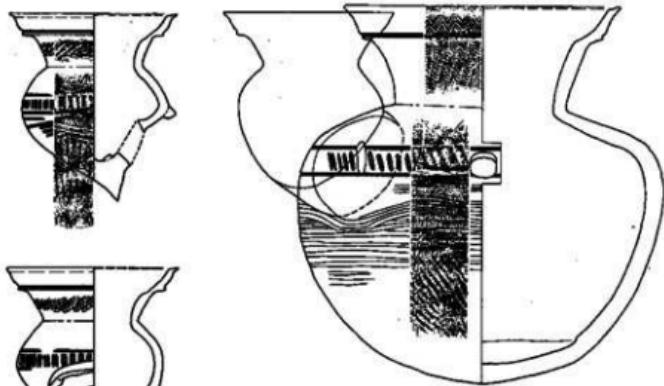
	器種・法量(cm)	成形	調整	胎土・焼成	備考
23-1	土師器有段高坏。 口径16.7、器高 11.0、坏深さ4.3。	口縁端部は外方に そり、坏部は全体 に丸みがある。段 ははっきりしてい る。	なでを基本とし、箇 部内面にはしづり目 がみられる。坏部内 底面及び外面段部に 刷毛調整を施す。	良好。砂粒もほ とんど含まない。 均質に焼きしま っていいる。	坏部内面に暗紋を 施す。坏部に脚部 をはめ込んで接合。
23-2	土師器有段高坏。 口径17.2、器高 10.9、坏深さ3.9。	同上	同上	同上	同上
23-3	土師器塊形高坏。 復元口径13.2、器 高10.1、坏深さ 4.1。	坏部は丸く深い。 口縁端部は少々内 傾している。	同上	同上	坏部上半は左右対 称復元。
23-4	土師器塊形高坏。 口径14.3、復元器 高9.9、坏深さ3.9	同上	同上	同上	脚部は左右対称復 元。箇部中央は圓 上復元。
23-5	土師器塊形高坏。 口径14.2、器高 9.9、坏深さ3.9	坏部は丸く深い。 口縁端部は内傾ぎ みにほぼ直立して いる。	同上	同上	
23-6	土師器高坏脚部。 現存高5.8。		箇部内面にしづり目 がみられる。	ややゆるく、砂 粒はほとんど含 まない。	全面風化。
23-7	土師器壺、復元口 径7.2、同標高15.3、 同最大径16.0	やや扁平な体部を 有する。	外面刷毛調整の後、 回転方向のなで、内 面もなで調整が施さ れる。	同上	圓上復元のため、 全体的な形状にや や検討を要す。
24-1	土師器壺。 口径11.4、器高5.0。	深い。口縁端部は やや内傾。	外面下半は刷毛、内 面底部は横なで、他 は回転なでを施す。	良好。少量の砂 粒を含む。	
24-2	土師器壺。 口径11.2、器高5.1。	同上	同上	同上	
24-3	土師器壺。 口径12.0、器高5.4。	同上	同上	同上	
24-4	土師器壺。 口径11.3、器高5.3。	同上	内・外面とも上半は 回転なで、下半は不 明。	同上	全面風化。

	器種・法量(cm)	成形	調整	胎土・焼成	備考
24-5	土師器壺。口径11.3、器高4.7。	同上	内・外面とも上半は回転なし、下半ははっきりしないが、外面に刷毛目がかすかに残る。	良好。少量の砂粒を含む。	全面に軽く風化。内面に放射状の暗紋を施すが、底部のみである。
25-1	須恵器壺。口径12.3、器高11.7、腹部最大径11.6。	丸い体部を有し、2段となる口唇をもつ。頸部は短い。	回転なしを基本とし、その後に施紋、波状紋は極めて緻密であり、正確な本数は確認できない。	良好。砂粒をあまり含まずよくしまっている。	底部に焼成後の穿孔。下方から叩き割ったものであろう。
25-2	須恵器壺。口径9.7、器高14.9、腹部最大径12.9。	丸い体部を有する。	回転なしを基本とし、その後に施紋、内面底部になで消した青海波がかすかに見られる。波状紋は25-1と同様。	同上	同上
25-3	須恵器蓋坏壺。	口縁は高く、口唇は2段となる。	内・外面共に回転なしを施す。	同上	左右対称復元。口径は推定。
25-4	須恵器蓋坏壺。復元口径13.4、同器高5.5。	同上	内・外面共に回転なし。外面天井部付近には時計回りの回転ヘラ削りを施す。	同上	左右対称復元。
25-5	須恵器蓋坏身。復元口径11.9、同器高5.5。	同上	内・外面共に回転なし。外面底部には回転ヘラ削りが施されるが、方向は不明。	同上	同上
25-6	須恵器壺。高台を有する。口径8.1、器高13.3、最大径17.1。	外反する高台をもち、口縁は短い。体部は肩が大きく張る。	外面上半は回転なし、下半は叩きをなで消した後にカキ目を施す。内面も上半は回転なしで、下半は青海波をなで消している。	良好。砂粒を含む。	
25-7	須恵器壺。口径12.1、器高4.2。	口唇は軽く外反する。	内・外面共に上半は回転なしで、下半は横なでを施す。	やや良。ゆるめ。	作りはやや粗。
25-8	須恵器壺。復元口径12.0、同器高4.3	同上	内面上半は回転なしで、下半は横なし。外面は回転なしで、底部は糸切りをしている。	同上	左右対称復元。

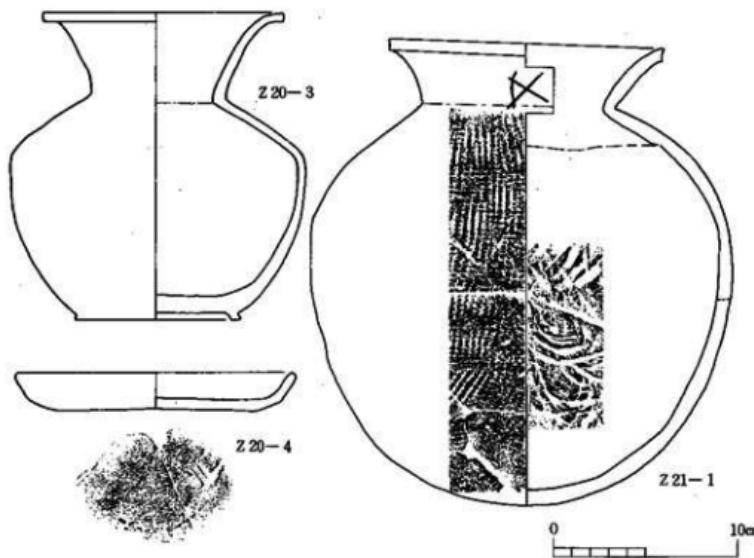
	器種・法量(cm)	成形	調整	駄土・焼成	備考
SX 01 - 1	須恵器蓋坏蓋。口 径15.2、器高3.6、 つまみ径4.1。	つまみをもち、か えりを有する。	外面天井部(つまみ の内側)及び内面天 井部は横なで、他は 回転なでを施す。	良好。	端部付近にSX 01 - 2の口縁端部の 一部が付着、その 内側と外側とでは 明らかに色調が異 なる。外側の色調 はSX 01-2の外 面の色調と同様で ある。以上より、 正立したSX 01-1 の上に倒立した SX 01-2をのせて、 セットで焼いたこと が確認できる。
SX 01 - 2	須恵器蓋坏身。口 径13.9、器高4.9、 高台径7.9。	外反する高台を有 する。	外底面及び内底面は 横なで、他には回転 なでを施す。	良好。	
表採- 1	須恵器蓋類体部。		外面方格状の叩き、 内面は回転なでを施 す。	良好。砂粒をあ まり含まない。 焼成はややあま めである。	
表採- 2	須恵器蓋坏蓋。復 元口径13.5。	下方に突出する端 部をもち、その外 面はやや凹状を呈 する。	内・外面共に回転な でを施す。	良好。砂粒をほ とんど含まない。	左右対称復元。
表採- 3	カワラケ小皿。復 元口径7.9。	全体的に薄手のも のである。糸切り 底を有する。	同 上	良好。砂粒をあ まり含まない。	同 上

(2) 石 器

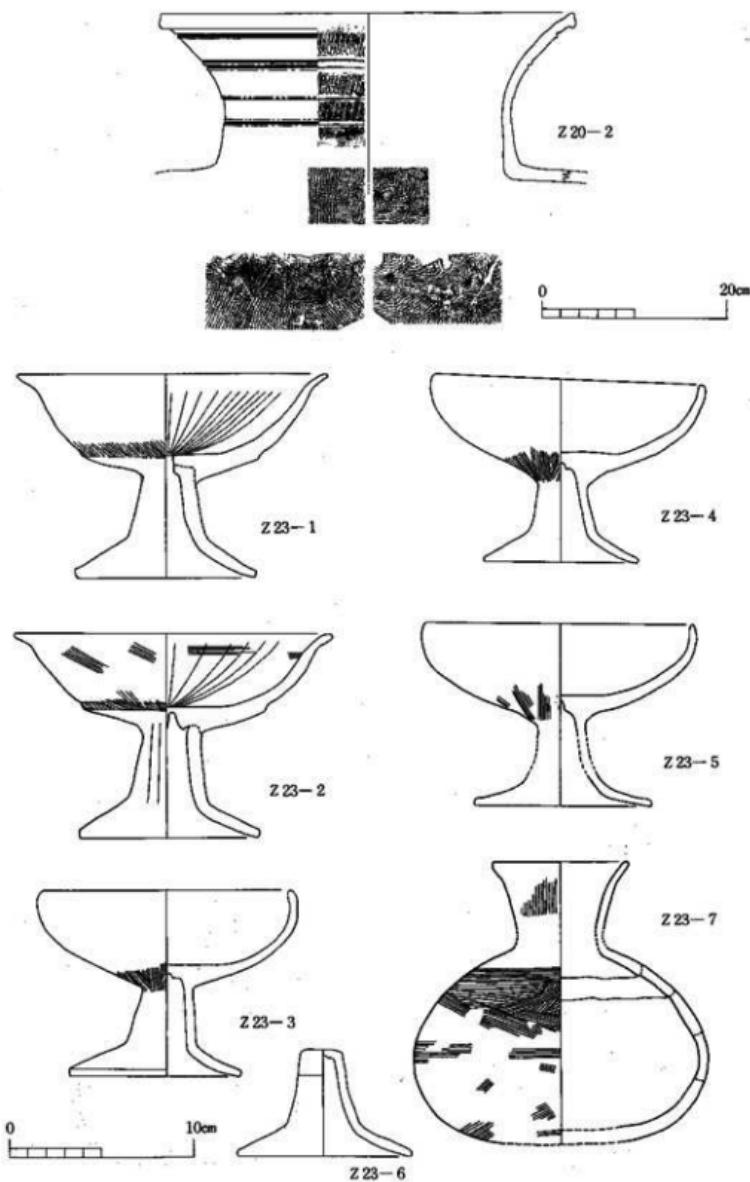
- No. 1 基部が欠けているが、全体としては整った蛤刃状石斧である。両面共に現存のところまで使用痕があり、側面の欠けていない方の片面が同じくそこまで使用痕がある。また刃部に 2箇所、使用中の刃こぼれと考えられるものがある。基部の欠損については、2段になっており故意の可能性もある。
- No. 2 4箇所の使用痕が確認された。最も広い面積を有する筋磨きに使用された面、他は普通の磨減面である。筋磨きの面は明瞭に 2 または 3 の筋があり、その中にやや不明瞭な稜をもっている。磨製石斧以外では最も堅い石質である。
- No. 3 2面に使用痕がある。最も広い面は他の自然角に比べ、若干の磨減分がある。もう一方は長軸で S 字状に起伏しており、上方は最も低い平坦面をなしている。
- No. 4 4面に使用痕がある。図中央の上方及び図右の面は、かなり磨減し平坦面である。他は若干の磨減であるが、図左のものは完全な S 字状に起伏し、下側は穴状になっている。
- No. 5 片面にのみ使用痕がある。一部欠けているが、整った磨石である。石質は来待石に似ており、気泡が多くある。裏面もやや磨減していた。
- No. 6 2面に使用痕がある。石質は軟く、表面もざらざらしている。
- No. 7 全面がやや磨減している。側面上方一箇所と下方左一箇所に使用痕をもつ敲石である。



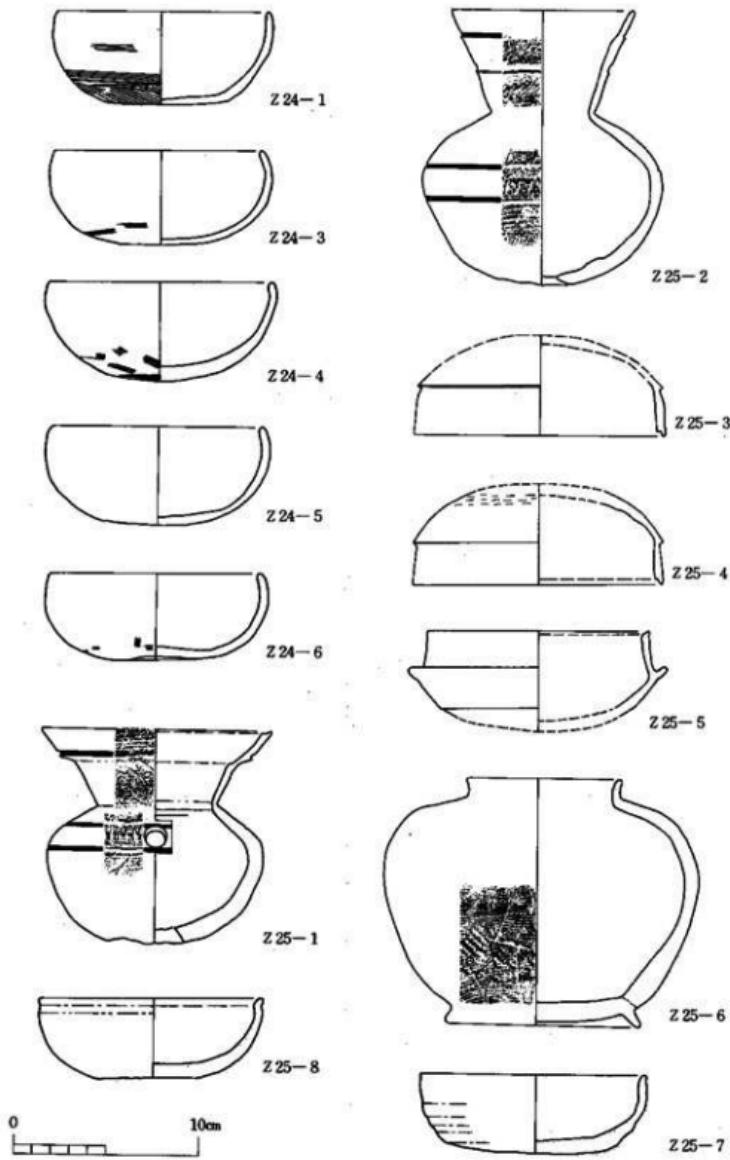
Z 20-1



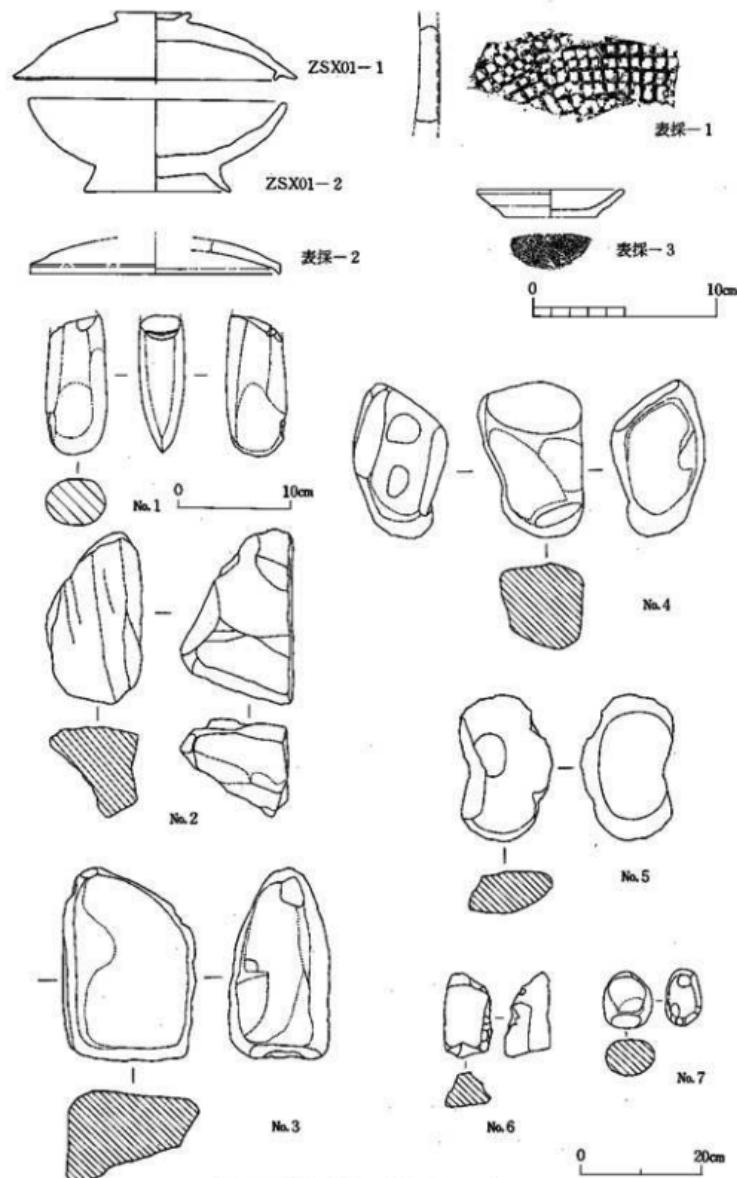
第17図 20・21号墳 出土遺物実測図



第18図 20・23号塚 出土遺物実測図



第19図 24・25号墳 出土遺物変測図



第20図 石回み遺構・表探遺物実測図

IV 結 語

今年度増福寺古墳群中の7基の古墳が、発掘調査により実態が明らかになった。昨年度分も含めると、12基の古墳の実態が明らかになったことになる。また本古墳群所在の同一丘陵内でも他に1基の古墳が明らかになっており、これらを合わせると本村の古墳群中でも最大級の古墳群の実態が明らかになり、県下の資料と比較検討するに充分な資料提供となった。

以下今年度を中心としたまとめと、本古墳群同一丘陵内及び県下との考察を述べていく。便宜上、遺構面からと遺物面からとに分けて考察する。

まず遺構面から考察するが、前提として本年度の各古墳をまとめてみよう。

- Z 20 Z 24を破壊して構築した周溝を有する方墳。主体部は小口に石を積み、枕石を置いた木棺1基。周溝内に須恵器子持甕1個体・土師器高坏数個個体・同壇1個体が伴い、墳丘平坦面で須恵器甕1個体の底部が原位置にあり、本古墳に伴っていた。後の祭祀に使用された須恵器坏等が、周溝内Z 25との境より出土。
- Z 21 Z 20を破壊して築造した周溝を有する方墳。主体部は木棺直葬1基。周溝内に土師器高坏数個個体と須恵器壺1個体を伴った。
- Z 22 詳細は不明であるが、周溝を有する方墳とみて誤りなかろう。
- Z 23 周溝を有する方墳と推定される。周溝内一箇所に土師器高坏を9個体並置（一部倒置）し、同周溝内の接近した箇所に土師器壇1個体が伴った。
- Z 24 周溝を有する方墳と推定される。周溝内一箇所に土師器坏6個体を並置し、周溝内及び周辺部でも若干の土師器片が伴った。
- Z 25 周溝及び墳裾平坦面を有する方墳と推定される。周溝内二箇所に遺物が集中し、須恵器壺1個体と同蓋坏各2個体・同坏数個個体・同甕1個体・同壇1個体とに分かれ伴った。周溝内に柱穴状ピットが2群に分かれ分布していた。
- Z 26 周溝及び墳裾平坦面を有する方墳と推定される。周溝内に柱穴状ピットが3群に分かれ、おおむね対をなしていた。周溝外縁部に2基の深い隅丸方形状の土塙があった。

Z 22～Z 26までは周溝及び墳裾平坦面の一部が検出されたが、墳丘及び主体部は既に開墾等により失われていた。

ZSX01 Z 21の周溝が埋まった時、Z 21の北西隅のやや東の周溝外縁部と交錯した所に、四壁及び床面を石で囲み、中に須恵器蓋坏のセットが壁に若干たてかけたようにあった。封土及び天井の状況は、上部が開墾等により攪乱されており不明であった。

以上が本年度の各古墳の概要であるが、以下これ等を踏まえて遺構面からみた考察をしていく。

遺構での本年度特に注目されるものは、Z 20の主体部小口の石及び枕石、Z 26の周溝外縁部にあった深い土塙2基とZSX01である。

第一のZ 20の主体部構造であるが、本村では初めて明らかになったものである。枕石の3個の内1個と東小口にあった石の1個とが、完全に接合できたことも興味深いものである。他の古墳の主体部が素掘りの木棺直葬であったのに比べ、本古墳の主体部構造は須恵器子持磧とともに、本古墳群中でもかなりの地位にあつたものであろうことが推定される。

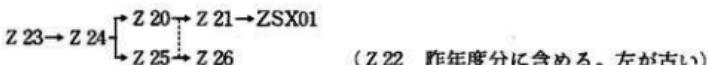
第二のZ 26周溝外縁部にあった深い土塙2基であるが、同じく本村で初めて明らかになったものである。両土塙の深さ0.6～0.8mまではやや壁が傾斜していたが、その下はほぼ垂直ないし内湾傾向で凹凸も見られた。上部を見ると墓塙とも考えられるが、下部をも考えあわせると性格不明のものである。遺物も検出されなかつたことが、一層不明確にし今後の発見を期待するものである。

最後にZSX01であるが、これもまた同じく本村では最初のもので、管見でも県内には類例がないようである。角のとれた河原石及び山石で四壁をつくり、底には扁平な河原石を敷くというものであるが、上部構造（天井・封土）が不明であることとは残念である。

また本年度発掘範囲では、土地所有者の境界を含んでいたためか、角のとれた山石及び河原石が多くみられ、Z 20・ZSX01に使用されたものと全く同じものであることは、何らか遺構が全部または一部が破壊されている可能性が高い。それを裏付けるものとして、玉磨石や敲石・磨石があった。

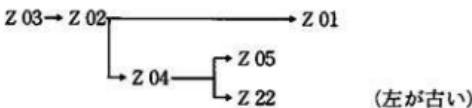
以上が本年度中注目されるものであるが、昨年度・本年度をあわせてみた考察を若干してみたい。

まず今年度発掘調査分を遺構面からみて、前後関係を検討したい。



上図がその関係を示したものであるが、文章で補足していくながら考察をする。いずれも明確に相互の断面から得たものではないが、位置関係及び検出状況から判断したものである。従って実証性に欠けるとも考えられるが、極一部での前後関係に誤りがあったとしても、ほぼ誤りはないものと考えている。その中で変動の可能性があるものとして、Z20・Z25・Z21・Z26である。その可能性は次のようにであろう。Z20とZ21・Z25とZ21は、ほぼ誤りないと考えられる。Z20とZ25の関係は、ややZ20が古いと考えられるが不明瞭である。いずれにしても、あまり差はないであろう。以上が、今年度発掘調査分から考えられることである。

次に昨年度分をも含めた中で、総合的考察をする。下図は昨年度分を、遺構・遺物からみた前後関係である。



この中で遺構の在り方からZ22を加えているが、Z05・Z01との関係は不明確である。Z22に遺物を伴わないので実証性に欠けるが、本古墳群の傾向が高所から低所へとなっているので、Z05の方がやや古い可能性があり、そしてZ01よりも古いのではなかろうか。昨年度分と今年度分の関連は、位置関係ではZ04とZ22によって接するが、Z22の性格等が不明のためミッションリング的なものになっている。しかし今年度分の後述する遺物の面をも考慮すると、Z22とZ23の間に時間的空間が考えられ、昨年度分と今年度分とは時間的一本の線にならないと考える。後述の遺物面からの考察と重複するので詳述は省くが、昨年度分と今年度分とは同一時期に二つのグループとして形成されたものである。加えて土井13号墳^{註2}もあるので、本古墳群のある丘陵上に群集している古墳は、今年度までに明らかになったものと同一時期に、小グループを形成しながら数基づつ築造されていったと推定できよう。そしてZSX01のような後代にはまた、墳墓地的要素を持つ丘陵となったとも考えられよう。

(官本)

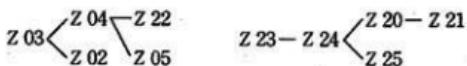
これまで記してきたように、今回調査した7基の古墳のうち6基より伴う土器が検出されている。また増福寺古墳群からは1980年度の調査で他に5基の古墳から供獻土器が検出されたが、これらの土器は何れも山本清氏による山陰の須恵器編年Ⅰ期・Ⅱ期併行となるものである。他に同時期の土器を出土した八雲村内の古墳としては、勝負谷1号墳^{註5}、土井13号墳^{註5}、中山2号墳^{註7}が存在するが、これらの古墳と出土遺物は山陰の古式須恵器併行期の研究においての貴重な資料となろう。

ところで現在島根県における須恵器編年としては山本編年が一般に用いられており、その編年序列の妥当性については疑いのないところである。しかし山本編年のスケールは今となっては多少大まかすぎるもので、増福寺古墳群のような近接した時期の古墳群の把握においては必ずしも充分有効とは言えまい。また最近島根県内における当該期の遺跡調査例はかなりの増加をみせており、古式須恵器併行期の土器編年細分化の資料的条件はかなり整備されてきたものと思われる。

従って以下に八雲村出土の土器を中心にして出雲地方東部における古式須恵器及び同併行期の土師器編年を検討し、増福寺古墳群の築造時期を中心とするいくつかの問題について述べることとする。この作業なくしては増福寺古墳群の性格、内容を理解することは無理であろうし、報告者としての責任を果し得ないと思うからである。

具体的な編年にあたっては増福寺古墳群で確認された二系統の切合関係を中心とし、出雲地方東部域出土の関連土器に検討を加える。そのような作業にあたって特に有効と思われる資料は、松江市金崎古墳群^{註8}、薬師山古墳^{註9}、長砂古墳群^{註10}、荒神谷7号墳^{註11}、東出雲町大坪古墳群^{註12}、安来市御立山古墳群等で検出されているが、それらの個々の内容については各報告にゆずることとする。

さて、從来島根県内の当該期の遺跡で切合関係をもつて編年を行えるような資料は存在しなかった。しかし二次にわたる増福寺古墳群の調査の結果、かなりの数の古墳が切合関係をみせており、土器の前後関係が確実に捉えられる資料が出現した。つまり古い順に



と並ぶことが確認された。このうちZ 22以外からは土器が検出されている。左側の切合関係については出土土器の型式を検討した上で前回の報告で編年序列を

示しており、その内容について今のところ誤りは見られないためここでは触れない。右側（本年度調査分）の切合い関係については以下にそれぞれの出土土器の解説を記し、編年の基準にしたいと思う。

- Z 23…土師器高坏、壺が出土している。高坏は Z 02例、薬師山例、御立山1群4号例とほとんど見分けがつかず、同一型式とすべきである。
 - Z 24…土師器塊が出土している。塊の出土例は他にあまり多くなく型式変化も不明であるが、本例は御立山1群4号例と区別の困難なものである。
 - Z 20…須恵器子持壺等が出土している。壺は全体的な器形、作り等からZ 25例に類似したものである。大坪3号墳 Pit 例と較べると体部のふくらみ、頸部の様相等に違いがあり、薬師山例とは口縁の作り等に型式差がある。形態から見た時両土器の中間的様相を示しているが、どちらとも明確に区別できるものと言えよう。
 - Z 25…須恵器壺、壺、蓋坏が出土している。壺については上記の通り。蓋坏は口縁のたちあがり、口唇の作り、器形、蓋の段の状況等の点で荒神谷7号例よりも古相を示し、薬師山例により近いものである。しかし薬師山例とは削りの深さ、受部の作り、口縁のたちあがり等に型式差を思われるものがある。つまり荒神谷例と薬師山例との中間的な様相を示しているが、より薬師山例に親近性のあるものと言えよう。
 - Z 21…須恵器壺が出土しているが、この遺物については他の遺跡出土の遺物との比較は困難であるが、やはり古相を示すものと言える。
- 以上のような切合い関係の確認と土器の観察の結果をまとめたのが編年図（第20図）である。基本的内容としては前回の報告で行った検討結果と一致するが、さらに細分の必要を認めたため型式内容が変化している。また不充分ながらも古墳の切合い関係を中心に検討したため、客觀性のかなり高い編年となったはずである。増福寺古墳群の2次にわたる調査の成果の1つとしてこの編年案を提示する。以下には各型式の内容について簡単に記しておく。
- I期…薬師山古墳例を標準とする。須恵器蓋坏における丸みをもった器形、高いたちあがり、深いへラ削り等を指標とする。土師器は増福寺2号墳例が典型的で、坏部が深くしっかりとした作りをなしている。
 - II期…増福寺25号墳例を標準とする。須恵器蓋坏身部のたちあがりはやや低

く、直線的になり、削りも浅くなる。口唇の作りも退化を示すが全体的な器形はⅠ期と類似する。頬もⅠ期によく似るが、口縁の状況や口唇の作りにおいて異なる。土師器は増福寺4号墳例が対応するであろう。

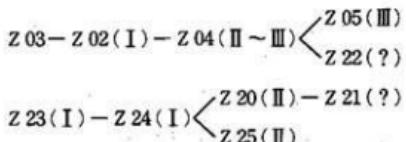
○Ⅲ期…大坪3号墳 Pit 例を標式とする。須恵器蓋坏は明確な例を見ないが、建は体部がやや扁平になり、長頸化の傾向をみせている。土師器高坏は坏部の浅い、成形の難なものとなる。増福寺5号墳例はⅢ期の可能性が高いが、現時点でⅡ期とⅢ期の土師器は区別が困難である。

○Ⅳ期…中山2号墳例、荒神谷方墳例を標式とする。須恵器蓋坏身部のたちあがりはさらに低くなり、蓋部肩の段も目立って鈍くなる。蓋、身共に削りの範囲が浅くなっている。今のところ土師器は確認されない。

○Ⅴ期…金崎9号墳例を標式とする。須恵器蓋坏は全体的にかなり便化しており、山本編年Ⅲ期へと近づきつつあるものと言える。頬の長頸化も進んでいる。今のところ増福寺古墳群ではⅤ期の遺物は確認されない。

なお以上の編年のⅠ期は現在のところ出雲最古の須恵器に含まれるもので、ⅠからⅢ期は山本編年Ⅰ期に、Ⅳ・Ⅴ期は同Ⅱ期におおむね対応するものである。

さて、以上の編年から見た増福寺古墳群の時期について触ることとする。古墳個々の切合い関係に編年図に記した内容を併せ考えると、



との順序と時期とをもって築造されたことが解る。Z 26については時期的確証はないが、以上の古墳群が基本的に高所→低所へと築造されている点から考えて、Z 21に後出するものと考えて良いのではないかと思う。

以上の事実から指摘できることは幾つかあるが、それをまとめると

- 築造場所、時期からみて5～6基を単位とする2つの小古墳群に分かれる。
 - 各小古墳群内では基本的に高所→低所へと築造が進められる。
 - 築造時期は何れも増福寺編年Ⅰ～Ⅲ期にわたるものである。
- の3点とできよう。従って増福寺古墳群は、それぞれほぼ同時に出現し、継続し、終末を迎える5～6基単位の複数の小古墳群に分けうるのではなかろうか。つま

りは当時の社会は一つの古墳群を形成する大集団内に複数の小集団を有しており、それらの小集団がそれぞれ決められた一定地内に、高所から低所へと墳墓を造ったことになろう。以上のようなことが、出雲の尾根上小規模古墳群について普遍的に言えることか否か、またそのような墳墓のあり方にいかなる評価を与えるべきかはなお今後類例の増加を待って検討せねばなるまいが、このような事例に触れることができたのは増福寺古墳群の調査における一つの成果と言えよう。

なお増福寺古墳群の同一丘陵上には、増福寺裏山古墳群、土井古墳群、四歩市古墳群など計90基の墳墓が確認されているが、そのうちやはり尾根上小規模古墳である土井13号墳からも今回調査したものに併行する時期の遺物が出土している点も注意しておくべきであろう。加えて出雲における尾根上の古墳群は、調査例の増加に従ってそのほとんどが古式須恵器併行期であることが解ってきた。逆に横穴のほとんどが山本編年Ⅲ期以降の所産であることより、尾根上小規模古墳のほとんどが横穴の出現以前に築造された（尾根上小規模古墳群は基本的に横穴群に先行する）として問題なかろう。

最後に古墳群形成以降の遺物について触れておこう。ZSX01出土の須恵器蓋坏は箱形石棺内よりセットで出土したものであるが、観察の結果セットのまま焼かれていることが判明した。つまり身部口縁の一部がはがれていたが、その部分は蓋部上面に付着していた。また身部外面に自然釉がかかっており、蓋部は外辺部にのみ自然釉がみられ、その跡は身部の口縁の形に一致していた。以上のことよりこの蓋坏はセットのままで、正立した蓋部の上に倒立した身部をのせた状態で焼かれたものであることが解った。須恵器生産の問題に関連する事実として触れておいた次第である。

また表探資料のなかに方格状の叩き目をもつ須恵器が一点出土している（第20図）。この叩き目は尾高城址出土例^{註15}、青木遺跡HSX69出土例^{註16}に類似したものであり、村上勇氏の分類による（C）に近いものと思われる。ただ氏の分類された内容とは色調において異なるようである。なおこの種の須恵器は八雲村内で他に1例検出されている。御崎谷遺跡出土例^{註17}は壺の口縁であり復元口径32.6cmを数えるが、その体部の叩きは方格状であり、目の大きさと叩きの深さ、色調等の点で増福寺例によく似たものである。出土例のさほど多い遺物でないため特筆しておいた。

（房宗）

- 註1 東森市良、宮本節昭、房宗寿雄 「増福寺古墳群発掘調査報告書」 八雲村教育委員会 1981年
- 註2 柳浦俊一、内田律雄 「速報八雲村土井13号墳の発掘」『季刊文化財』35
1979年
- 註3 註1と同じ
- 註4 山本清 「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』 1960年
- 註5 東森市良 「勝負谷1号墳発掘調査概報」 八雲村 1974年
- 註6 註2と同じ
- 註7 宮本節昭 「中山2号墳・中山五輪塔群」 八雲村教育委員会 1982年
- 註8 山本清 「山陰の須恵器」(前掲)。
- 藤原幸雄、足立千利、岡崎雄二郎 「史跡金崎古墳群」 松江市教育委員会
1978年
- 註9 山本清 「島根大学敷地兼師山古墳遺物について」『島根大学輪集人文科学5号』
1955年
- 註10 岡崎雄二郎他 「野田遺跡 向荒神古墳」 松江市教育委員会 1981年
- 註11 山本清 「荒神谷・後谷古墳」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』 1975年
- 註12 卜部吉博 「大坪古墳群」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報
告書—I』 1976年
- 註13 山本清 「御立山古墳群出土の土器」 杉原莊介、大冢初重編 『土師式土器集成2』
東京堂出版 1972年
- 註14 東森市良他 「八雲村の遺跡」 八雲村教育委員会 1978年
- 註15 小原貴樹他 「尾高城址」 尾高城址発掘調査団、米子市教育委員会 1978年
- 註16 青木遺跡発掘調査団 「青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ」 1978年
- 註17 村上勇 「山陰の中世のやきものに関する覚え書」『松江考古第2号』 1979年
- 註18 宮本節昭、房宗寿雄 「御崎谷遺跡 小屋谷古墳群」 八雲村教育委員会
1981年

第21図 増福寺古墳群關係編年図

	古 墳 名	須 恵 器 蓋 坏	須 恵 器 裏	須 恵 器 (その他)	土 師 器 高 坏	土 師 器 (その 他)	
I 期	○葉姫山古墳 ○金崎1号墳 ○御立山1群4号墳 ○増福寺2号墳(Z02) ○増福寺23号墳(Z23) ○増福寺24号墳(Z24)	 			 	 	 
II 期	○増福寺25号墳(Z25) ○増福寺4号墳(Z04) ○増福寺20号墳(Z20)	 					
III 期	○大坪3号墳Pit ○増福寺5号墳(Z05)				 		
IV 期	○荒神谷7号墳 ○中山2号墳 ○増福寺1号墳(Z01)	  					
V 期	○金崎9号墳	 					

V 図 版

図版 I



20・21号墳 発掘前近景（東より）

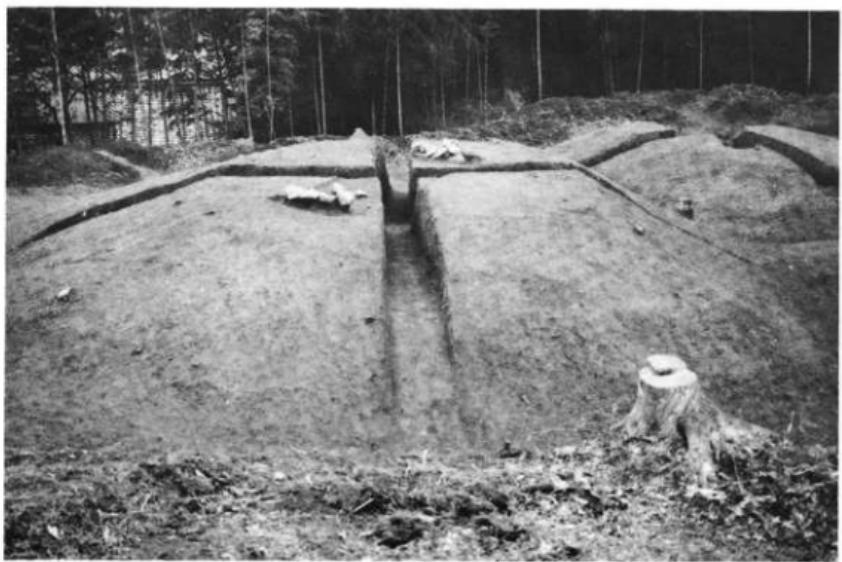


20・21号墳 発掘後近景（東より）

図版II

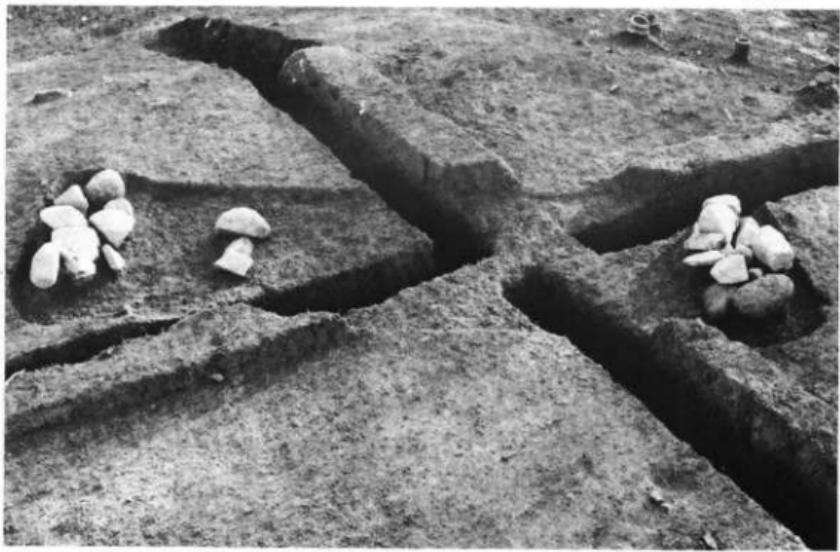


20号墳 発掘前（東より）



20号墳 発掘後（東より）

図版III



20号墳 主体部（北東より）

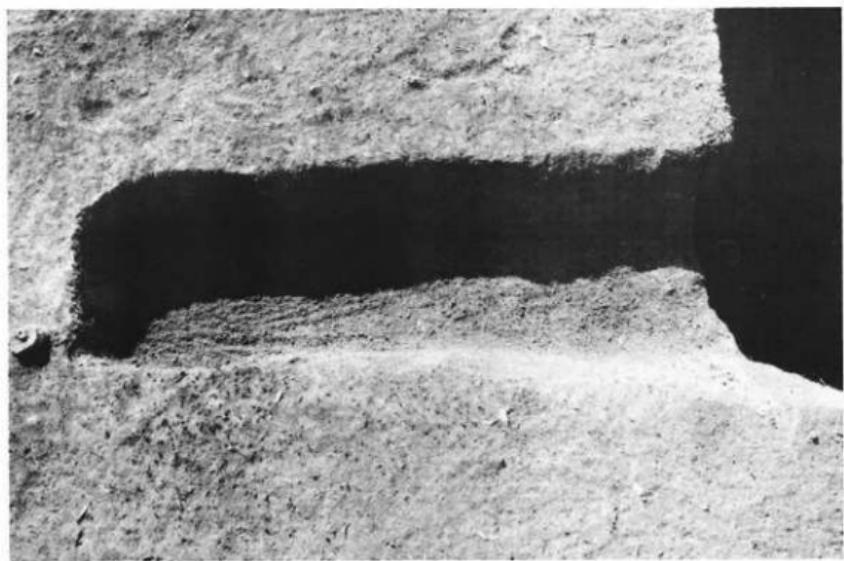


21号墳 発掘前（南より）

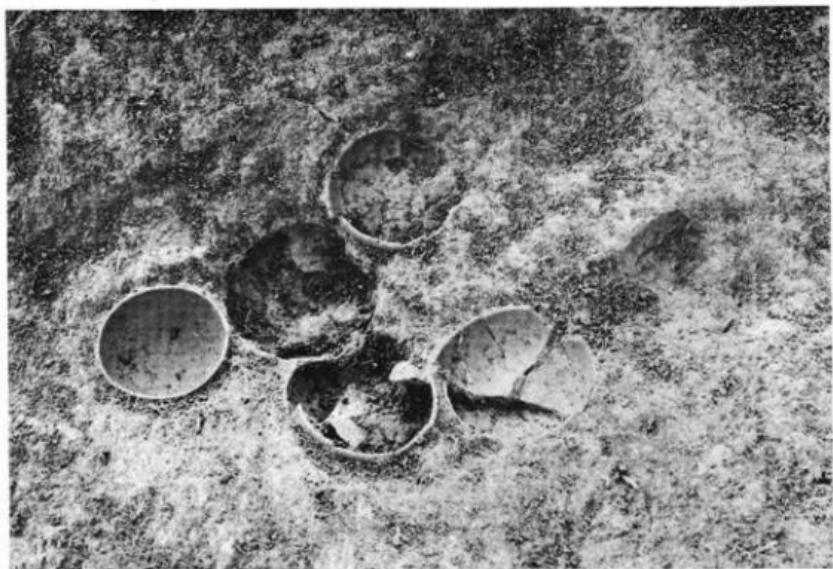
図版IV



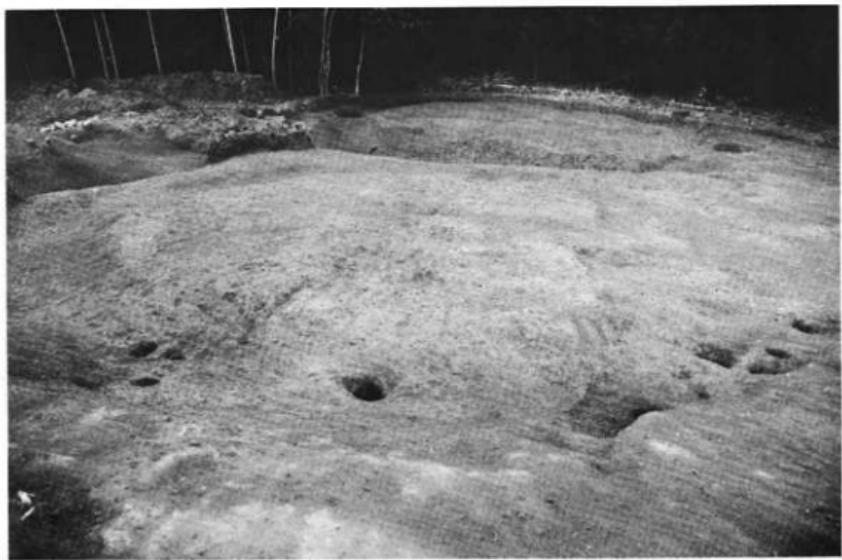
21号墳 発掘後（南より）



21号墳 主体部（北東より）



24号墳 土師器出土状況（北より）



25号墳 検出後（南東より）

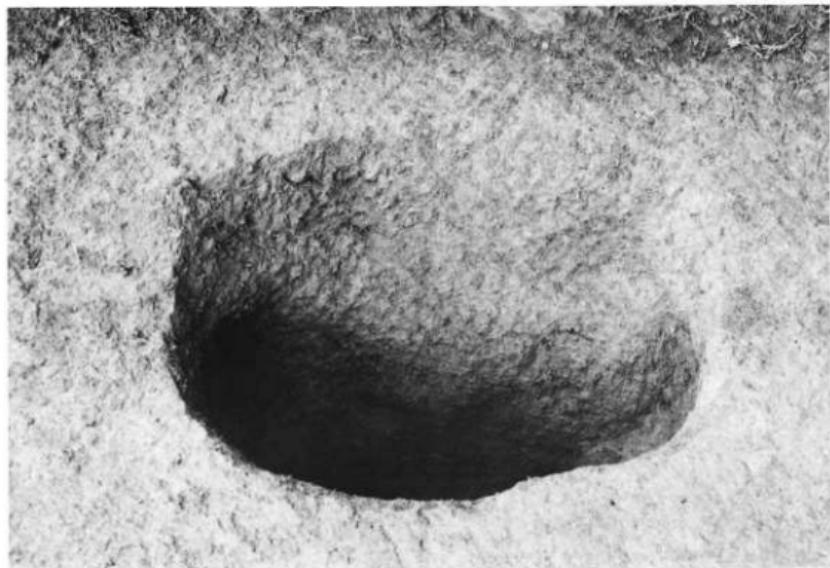
図版 VI



26号墳 検出後（北東より）



26号墳 土塚1（東より）



26号墳 土塚2（東より）



23号墳

24号墳

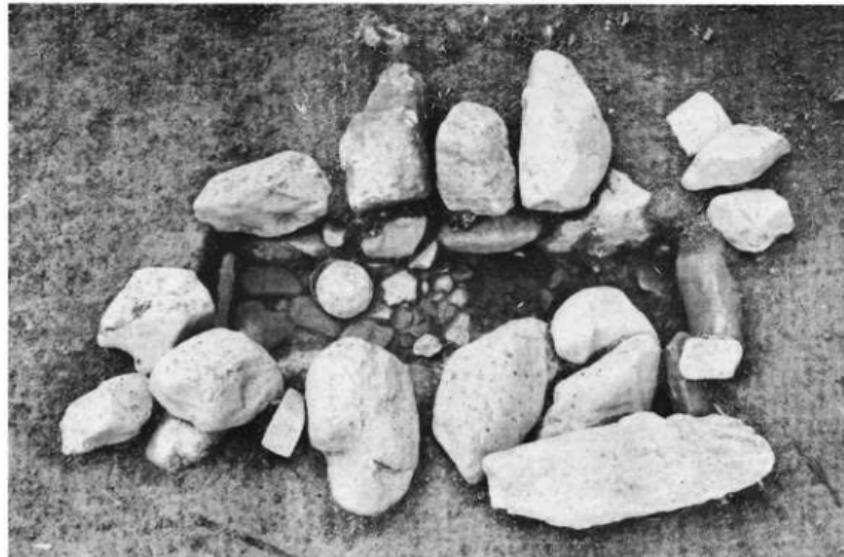
25号墳

20号墳

21号墳

26号墳

検出後遠景（北より）



石畳み遺構検出状況（東より）



石畳み遺構掘り方（東より）



Z 20-1



Z 20-3



Z 20-2



Z 20-3



Z 21-1

図版 X



Z 23-1



Z 23-4



Z 23-2



Z 24-1



Z 23-3



Z 23-6



Z 24-2



Z 24-3



Z 24-4



Z 25-6



Z 24-5



Z 25-7



Z 25-1



Z 25-8



Z 25-2



SX01-1

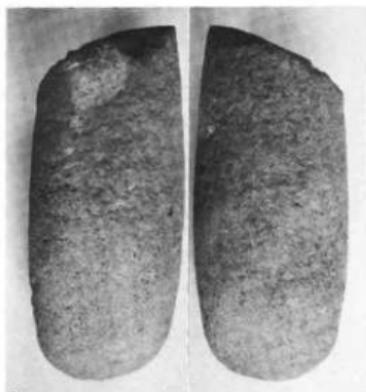
SX01-2

24号墳 出土土師器 25号墳・石圓み遺構 出土須恵器

図版Ⅺ



表採-1



No.1

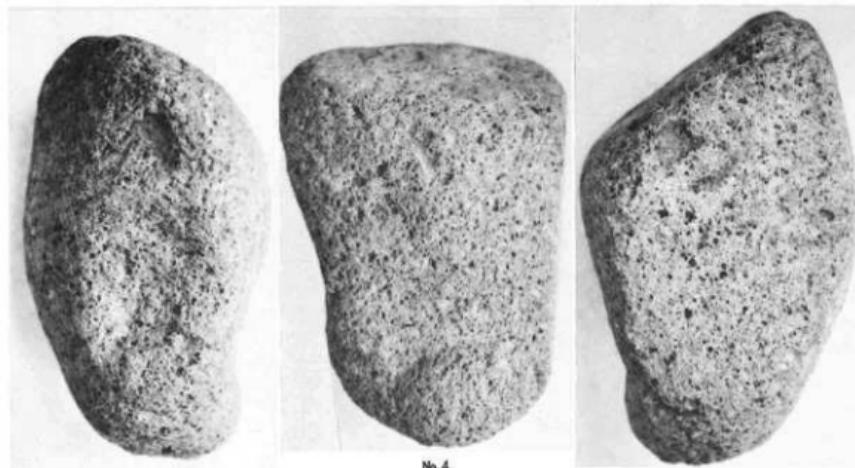


No.2

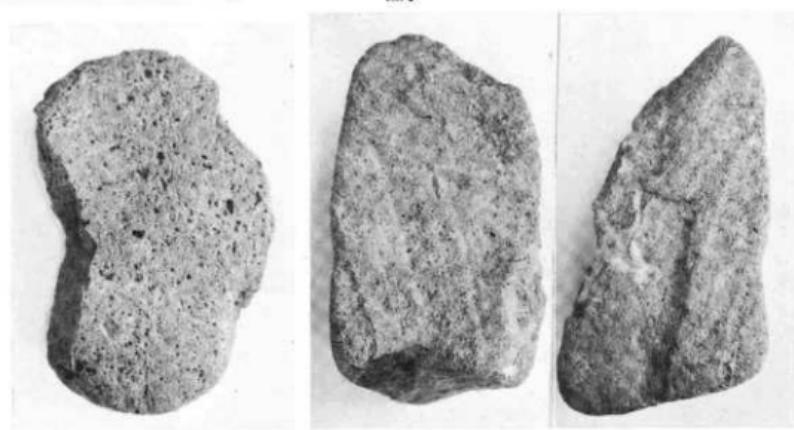


No.3

表採須恵器・石器



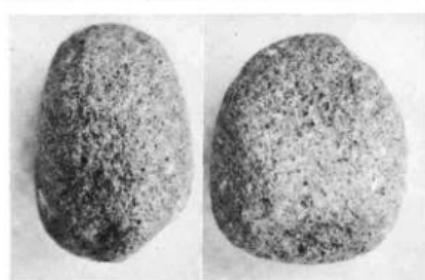
No. 4



No. 5



No. 6



No. 7

昭和57年3月20日印刷
昭和57年3月25日発行

昭和56年度
宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う
増福寺古墳群発掘調査報告書

編集
発行 八雲村教育委員会
印刷 黒潮社